

WORLD FEDERATION
OF INTERNATIONAL
MUSIC COMPETITIONS

国際音楽コンクール世界連盟会員

大阪国際室内楽 コンクール&フェスタ 2023

Osaka International Chamber Music Competition & Festa 2023



事業報告書



公益財団法人
日本室内楽振興財団



Osaka International Chamber Music Competition & Festa 2023

大阪国際室内楽 コンクール&フェスタ2023

CONTENTS

写真	2
開催要項	6
開催組織	7
コンクール審査委員、フェスタ審査員	8
開催スケジュール	10
コンクール&フェスタ2023の新たな取り組み	11
コンクール第1部門	12
コンクール第2部門	14
フェスタ	16
入賞団体	18
歓迎パーティー、記念パーティー	22
表彰式	23
披露演奏会	24
大阪チェンバーミュージック・ホライゾン2023	25
コンクール委嘱作品	26
入場者／ライブ配信	27
記者発表／記者会見	28
サウンドチェック／練習場／ボランティアスタッフ	29
フェスター一般審査員	30
進行日程(2020~2023年)	31
課題曲選定、予備審査、参加承認連絡	32
拠点別応募／参加数	33
広報宣伝活動	34
広報関連製作物	35
組織と担当	36
コンクールレポート(執筆:後藤菜穂子)	37
コンクールレポート(執筆:ロバート・マルコウ)	39
審査委員鼎談—大阪コンクールの優勝者	43
スタッフリスト	48



Osaka International Chamber Music Competition & Festa 2023

世界でも稀に見る室内楽の祭典が6年ぶりに日本で開催されました。

新型コロナウイルスによって、世界の音楽界は過去に経験の無いほどの苦境に立たされましたが、
それでも人々は音楽を希求することは止めませんでした。

そして、苦難を乗り越えた素晴らしい音楽家たちが、大阪に再び集まることが出来ました。

「大阪国際室内楽コンクール」は、室内楽に取り組む優秀な音楽家を世界に広く求め、優れた演奏を顕彰し、
人材を育成するもので、「国際音楽コンクール世界連盟」の基準に基づいて運営します。

大阪国際室内楽コンクールと同時開催される「大阪国際室内楽フェスタ」は、
2人から6人までのアンサンブルであれば楽器の組み合わせも自由で年齢制限もありません。
しかもクラシック音楽はもとより、世界各国の伝統音楽・民族音楽をも対象にしています。

コンクール&フェスタは室内楽の振興、世界の室内楽アンサンブルのキャリア促進、
そして国際交流に寄与すること目的に、3年毎に開催されています。

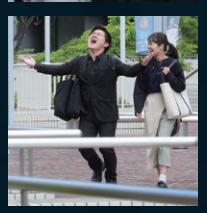


Osaka International Chamber Music Competition & Festa 2023

大阪国際室内楽 コンクール&フェスタ2023



Osaka Inte
Chambe
Competiti





開催要項

「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」は、日本での室内楽振興を図ることを目的に、1993年から3年ごとに開催するものです。 「大阪国際室内楽コンクール」は、室内楽に取り組む優秀な音楽家を世界に広く求め、優れた演奏を顕彰し、人材を育成するもので、「国際音楽コンクール世界連盟」の基準に基づいて運営します。 「大阪国際室内楽フェスタ」は、年齢制限がなく楽器編成が自由で、クラシック音楽をはじめ、伝統音楽、民族音楽でも参加可能な、世界の音楽の多様性と楽しみを共有する室内楽の祭典です。審査は一般審査員による投票によって行われます。 今大会は2020年に開催予定だった第10回大阪国際室内楽コンクール&フェスタのコンセプトを継承し、新たに「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ2023」として開催しました。

日程・会場	2023年 5月12日(金)～18日(木)	住友生命いづみホール 5月13日(土) フェスタ1次ラウンド<富山> 富山県高岡文化ホール 5月14日(日) フェスタ1次ラウンド<三重> 三重県文化会館
披露演奏会	大阪：住友生命いづみホール 2023年5月19日(金) 14:00開演	コンクール各部門第2位、第3位 フェスタ銀賞、銅賞
	19:00開演	コンクール各部門第1位 フェスタメニューイン金賞
	東京：サントリーホール ブルーローズ 2023年5月21日(日) 14:00開演	コンクール各部門第1位
演奏部門	コンクール第1部門 コンクール第2部門 フェスタ	弦楽四重奏 ピアノ三重奏／四重奏 2～6名までの器楽アンサンブル、楽器編成自由
応募資格	コンクール フェスタ	国・地域に関係なく1984年5月1日以降に出生した演奏者によって編成される団体 年齢、国・地域は問わない
賞・賞金	[コンクール第1／2部門共通] 第1位 250万円 第2位 120万円 第3位 80万円	[特別賞] ・MK記念会特別賞 50万円 ・ボルドー弦楽四重奏フェスティバル賞 ・ストリング・クアルテット・ビエンナーレ・アムステルダム賞 ・大阪国際室内楽コンクール2023アンバサダー賞
	[フェスタ] メニューイン金賞 150万円 銀賞 80万円 銅賞 50万円	[特別賞] ・フォーコロア特別賞 20万円 ・オンライン聴衆賞 10万円

[主催] 公益財団法人 日本室内楽振興財団
[共催] フェスタ1次 公益財団法人富山県文化振興財団／公益財団法人三重県文化振興事業団
[後援] 外務省／文化庁／大阪府／大阪市／関西経済連合会／日本演奏連盟／大阪ビジネスパーク協議会／
住友生命いづみホール／読売新聞社
[協賛] 岩谷産業／大阪ガス／大林組／鹿島建設／きんぐん／サントリーホールディングス／清水建設／住友生命／積水化学工業
千趣会／ダイキン工業／大成建設／竹中工務店／東芝インフラシステムズ／ハウス食品グループ／非破壊検査／フジテック
[贊助] 読売テレビ
[提携協力] ボルドー弦楽四重奏フェスティバル／ストリング・クアルテット・ビエンナーレ・アムステルダム／
VdSQ & Festival4(www.vdsq.de)
[特別協力] 一般社団法人MK記念会

開催組織 (2023年5月開催時)

開催委員会

会長	松本 正義	日本室内楽振興財団会長、関西経済連合会会長
副会長	大橋 善光	日本室内楽振興財団理事長、読売テレビ放送社長
コンクール審査委員長	堤 剛	チェロ、サントリーノ芸術財団代表理事
フェスタ審査委員長	吳 信一	トロンボーン、京都市立芸術大学名誉教授
運営本部長	牧野 立太	日本室内楽振興財団常務理事

顧問

海野 義雄	ヴァイオリン、東京音楽大学客員教授
小川 典子	ピアノ、浜松国際ピアノコンクール審査委員長
栗林 義信	声楽家、日本藝術院会員
高橋 満保子	ヴァイオリン、元神戸女学院大学講師
西村 朗	作曲家、東京音楽大学教授
善積 俊夫	日本クラシック音楽事業協会参与
井上 礼之	ダイキン工業会長兼グローバルグループ代表
尾崎 裕	大阪ガス相談役
佐藤 義雄	住友生命保険特別顧問
鳥井 信吾	サントリーホールディングス副会長
牧野 明次	岩谷産業会長兼CEO
山口 多賀幸	非破壊検査社長

フェスタ名誉顧問

梅本 俊和	ピアノ、大阪音楽大学名誉教授
-------	----------------

コンクール専門委員会

入山 功一	日本クラシック音楽事業協会会長
大島 路子	ヴィオラ、カントゥス・クワルテット
大友 肇	チェロ、クワルテット・エクセルシオ
小栗 まち絵	ヴァイオリン、相愛大学名誉教授
久合田 緑	ヴァイオリン、京都市立芸術大学名誉教授
福山 修	大阪フィルハーモニー交響楽団事務局長
渡辺 和	音楽ジャーナリスト

フェスタ専門委員会

吳 信一	トロンボーン、京都市立芸術大学名誉教授
河野 正孝	オーボエ、関西室内楽協会代表
山崎 謙	住友生命いづみホール事業局長（支配人）
藤野 一夫	芸術文化観光専門職大学副学長
宮本 典博	読売テレビ放送ビジネスプロデュース局局長

● コンクール審査委員



堤 剛 日本／チェロ(サントリー芸術財団代表理事) 審査委員長

名実ともに日本を代表するチェリスト。桐朋学園子供のための音楽教室、桐朋学園高校音楽科を通じ斎藤秀雄に師事。1961年インディアナ大学に留学し、ヤーノシュ・シュタルケルに師事。1963年ミュンヘン国際コンクールで第2位、ブダペストでのカザルス国際コンクールで第1位入賞。これまでに鳥井音楽賞(現サントリー音楽賞)、ウジェヌ・イザイ・メダル(ベルギー)、芸術祭放送大賞、芸術祭優秀賞、レコードアカデミー賞、モービル音楽賞、N響有馬賞、日本藝術院賞、中島健蔵音楽賞、ウィーン市功労名誉金賞、毎日藝術賞(音樂部門)、文化庁創立五十周年記念表彰など多数受賞、表彰されている。2009年秋の紫綬褒章を受章。また同年、天皇陛下御在位二十年記念式典にて御前演奏を行った。2013年文化功労者に選出。2020年秋にはウィーン・フィルハーモニー管弦楽団日本公演においてソリストを務め、大反響を呼んだ。カナダ・西オンタリオ大学准教授、アメリカ・イリノイ大学教授、インディアナ大学教授を経て現在、桐朋学園大学特命教授(前学長2004～2013年)、韓国国立芸術大学客員教授。公益財団法人サントリー芸術財団代表理事、サントリーホール館長。日本藝術院会員。



マーティン・ビーヴァー アメリカ／ヴァイオリン(元東京クワルテット)

2002年6月からそのファイナルコンサートが行われる2013年7月まで、世界的に有名な東京クワルテットの第1ヴァイオリン奏者として活躍。カーネギーホールや、ウイグモアホール、ベルリンフィルハーモニー、サントリーホール、シドニーオペラハウスなど、世界の著名なホールで賞賛を博す。過去には、ヴィクトル・ダンченコ、ジョゼフ・ギンゴルド、ヘンリック・シェリングに師事し、エリザベート王妃国際音楽コンクール、モントリオール国際音楽コンクール、インディアナボリス国際ヴァイオリンコンクールにて入賞。その後エリザベート王妃国際音楽コンクール、モントリオール国際音楽コンクール、大阪国際室内楽コンクール、メルボルン国際室内楽コンクールなど主要な国際音楽コンクールの審査委員を務めている。ピアニストのキムラ・パーカー、チェリストのクライヴ・グリーンスミスと共にモントローズ・トリオ結成メンバーである。



澤 和樹 日本／ヴァイオリン(澤クワルテット)・指揮

1979年東京藝術大学大学院修了。「安宅賞」受賞。ロンニティボー、ヴィエニヤフスキ、ミュンヘンなどの国際コンクールに入賞。イザイ・メダル、ボルドー音楽祭金メダル受賞などヴァイオリニストとして国際的に活躍。1980年より文化庁在外研修員としてロンドンに派遣され、ジョージ・パウク、ベラ・カトーナ両氏に師事。1984年に東京藝術大学に迎えられるとともに本格的な演奏活動を開始。1989年には、文部省在外研究員としてロンドンの王立音楽院に派遣され、さらに研鑽を重ねた。この時期、アマデウス弦楽四重奏団メンバーとの出会いにより澤クワルテットの結成を決意する。1996年より指揮活動を開始。響ホール室内合奏団、九州交響楽団、東京フィル、日本フィル、札幌交響楽団、紀尾井ホール室内管弦楽団等にも客演し好評を博す。東京藝術大学音楽学部教授、音楽学部長を経て2016年より2022年まで東京藝術大学学長。東京藝術大学、英国王立音楽院名誉教授。



モニカ・ヘンシェル ドイツ／ヴィオラ(ヘンシェル・クアルテット) 副審査委員長

国際的に高い評価を受けている、ヘンシェル・クアルテットと多種多様なアンサンブルであるHenschel & Friendsの創立メンバーとして、日本のサントリーホール、ロンドンのウイグモアホール、ニューヨークのカーネギーホールなどの国際舞台で演奏をしている。ヴィオラ奏者、フェスティバル・ディレクター、講師としての国際的な活躍に加えて、文化政策やドイツの文化の変遷にも様々な形で関わっている。ドイツ文化審議会のメンバーであり、弦楽四重奏と各種アンサンブルの世界で最初の組織であるVdSQの代表として、指導、イベント計画、そしてプロモーションの将来的な枠組みを形成している。ビジネスや研究で培った道筋やメソッドを使って、VdSQ、また、室内楽イベントフェスティバル4連邦協会の創設者として、ドイツ弦楽四重奏ビエンナーレのキュレーターを務め、ドイツ・オーケストラ音楽家連合協会といったトップレベルの大学や文化的施設との協力関係を構築している。



元渕 舞 アメリカ - 日本／ヴィオラ(元ボロメオ弦楽四重奏団)

ソリスト、室内楽奏者、指導者として、北米、南米、ヨーロッパ、そしてアジアで高い評価を得ている。2000年にボロメオ弦楽四重奏団に入団して以来、世界の著名なコンサートホールで演奏した。ソリストとしては、ヨーヨー・マや小澤征爾とともに共演を果たしている。2022年7月に演奏活動から引退し、ニューアイラングランド音楽院と日本の天理教音楽院でヴィオラと室内楽の教員を務めるほか、世界中の音楽院や音楽祭で指導を行い、2021年のプリムローズ国際ヴィオラコンクールでは審査委員を務める。1989年MBSユース音楽コンクール、1990年と1991年にアンサンブル・コンクールで優勝し、日本国内で注目を集める。渡米した後は、フィヨン室内楽コンクールのジュニア部門第1位、タングルウッド音楽センターよりヘンリ・コーン記念賞を受賞。また、日本において著名なエッセイストでもあり、2022年7月に最初の著書が同友社出版から出版された。



アラスデア・テイト イギリス／チェロ(元ペルチャ・クアルテット)

2006年までペルチャ・クアルテットのメンバーとして国際的に活躍し、ウイグモアホールではレジデント・クアルテットを務め、ロイヤル・フィルハーモニック・ソサエティアワードを2回受賞し、初のBBCニュージェネレーションアーティストにも選出された。現職のヤング・クラシカル・アーティスト・トラストの最高責任者に至るまで、ギルドホール音楽院室内楽部長、マドリッドのソフィア王妃高等音楽院の教授等を歴任し、世界各地で指導を行っている。バンフ、大阪、メルボルン、ウイグモアホールなどの国際コンクールの審査委員としても頻繁に招聘されている。現在、オールドバラのスナイプ・モルティングスとカウンテス・オブ・ミュンスター・トラストの理事を務めている。教育活動の功績が讃えられHigher Education Academyのシニア・フェローに、英国オーケストラ連盟からはアーティスト・マネージャー・オブ・ザ・イヤーに選ばれた。



ヴァンサン・コック フランス／ピアノ(トリオ・ヴァンダラー)

パリ国立高等音楽学院、同大学院を経て、インディアナ大学でジョルジ・シェベックの指導を受ける。1987年にパリ国立高等音楽院の学生2人とともにトリオ・ヴァンダラーを結成。メナヘム・プレスラーとアマデウス・クアルテットのメンバーの指導の下で学ぶ。1988年にミュンヘン国際コンクール、1990年にアメリカのフィヨン室内楽コンクールで入賞。トリオとしての演奏は世界中の名高いステージで展開され、フランス放送フィル、ミネリア響、ベルリン放送響等と三重協奏曲、また二重協奏曲で共演する機会も多い。2010年よりローザンヌ高等音楽院で室内楽の教授を務める。2014年にはトリオ・ヴァンダラーのメンバーと共にパリの地方音楽院、2018年よりエクス＝アン＝プロヴァンスで指導にあたっている。ヨーロッパ、日本、台湾、南米、カナダでマスタークラスを開催し、リヨン、グラーツ、ヴェルチャッリ、ミュンヘンなどの国際コンクールの審査委員として招聘されている。



エッカルト・ハイリガーズ ドイツ／ピアノ(トリオ・ジャン・ポール)

ドイツのクレーヴェ出身。ハノーファーでカール=ハインツ・ケマリングに、そしてアメリカのバルティモアでレオン・フライシャーに師事する。ドイツ学術財団、ドイツ学術交流会、ドイツ音楽コンクールなどのスカラーシップを受賞。また、France Graage Performance スカラーシップも受けている。イタリアのヴェルチャッリ、ギリシャのアテネ、アメリカのソルトレイクシティやオスロなど、国際コンクールで多数受賞。またピアノ三重奏「トリオ・ジャン・ポール」として、1993年の第1回大阪国際室内楽コンクールで優勝している。現在はソリスト、室内楽奏者、歌曲伴奏者として世界中でコンサートに出演している。チューリッヒ芸術大学でピアノと室内楽の教授を務めるほか、国内外のマスタークラスで指導を行う。また、国際音楽コンクールでの審査委員も務める。



練木 繁夫 日本／ピアノ(桐朋学園大学名誉教授)

1976年ツーソンのバイエニアル・ピアノ・コンクールと1979年ピッツバーグのスリー・リヴァーズ・ピアノ・コンクールで第1位に輝いた。これまでにボストン響、シカゴ響、ピッツバーグ響、ワシントン・ナショナル響、メキシコ国立響、フランス放送管、そしてN響を含む日本的主要なオーケストラと共に演奏。また、1976年よりヤーノシュ・シュタルケルとともに世界各地を公演した。2009年紀尾井ホールでの「デビュー30周年記念リサイタル」は、各方面から高い評価を得た。1993年サントリー音楽賞を受賞。1990年シュタルケルと収録したポッパーの作品のCDが、グラミー賞のソリスト部門にノミネートされた。1997年にはオール・シューマン・プログラムの「パピヨン」が、文化庁芸術祭賞作品賞を受賞。1981年～2015年までインディアナ大学で教鞭をとった。現在、桐朋学園大学名誉教授、国立音楽大学招聘教授、相愛大学客員教授、エリザベト音楽大学非常勤講師。

※ウェイガン・リ先生 アメリカ/ヴァイオリン(上海クワルテット)も審査に参加予定でしたが、都合によりキャンセルになりました。

● フェスタ審査員



呉 信一 日本／トロンボーン(京都市立芸術大学名誉教授) 審査員長

大阪音楽大学卒業。大阪フィルハーモニー交響楽団に入団。1975年西ドイツ、デットモルト国立音楽大学に留学。大阪フィルハーモニー交響楽団首席トロンボーン奏者として、20年間にわたる演奏活動の後、室内楽やソロの分野で幅広い演奏活動を行い、後進の指導にもあたっている。現在、京都市立芸術大学名誉教授、相愛大学客員教授、大阪音楽大学客員教授。サイトウ・キネン・オーケストラ、ジャパンプラス・コレクション、いずみシンフォニエッタ大阪の各メンバー。ハイブリッドトロンボーン四重奏団主宰。関西トロンボーン協会会長。大阪文化祭奨励賞、及び本賞を受賞。2014年11月京都市文化功労者受賞。



河野 正孝 日本／オーボエ(関西室内楽協会代表) 副審査員長

大阪音楽大学卒業。フライブルグ音楽大学卒業、ハインツ・ホリガーに師事。ハノーファー音楽大学卒業、インゴ・ゴリツキに師事。帰國後、関西室内楽協会、大阪チェンバーオーケストラを設立し室内楽活動を積極的に行う。1989年大阪市「咲くやこの花賞」受賞。又、ソリストとしてリサイタルや大阪フィルハーモニー交響楽団との共演など活発に演奏を行う。宝塚ベガコンクール審査員、大阪国際室内楽コンクールアドバイザーなどを務める。大阪芸術大学で後進の指導にあたる。関西室内楽協会主宰、大阪チェンバーオーケストラ代表、やまなみグリューネ管弦楽團音楽監督。

審査は上記2名のほか、事前に公募した中から選ばれた一般審査員により行われました。

5/13 1次ラウンド/富山県高岡文化ホール 107名

5/14 2次ラウンド/三重県文化会館 93名

5/17 セミファイナル、ファイナルラウンド/住友生命いづみホール 199名

5/17 セミファイナル/オンライン審査 59名

開催スケジュール

Schedule

5 MAY

12 金 10:00-20:15

第1部門 1次予選

10団体

13 土 10:00-21:00

第2部門 1次予選

11団体

住友生命いずみホール

13 土 10:30-16:00

フェスタ 1次ラウンド

6団体

富山県高岡文化ホール

14 日 10:30-20:15

第1部門 2次予選

8団体

住友生命いずみホール

14 日 10:30-16:00

フェスタ 1次ラウンド

6団体

三重県文化会館

15 月 10:30-19:15

第2部門 2次予選

7団体

16 火 10:30-17:00

第1部門 3次予選

5団体

17 水 10:00-17:30

フェスタ セミファイナル&ファイナル

6団体／3団体

18 木 10:00-18:00

第2部門／第1部門 本選

各3団体

住友生命いずみホール

19 金 14:00

入賞団体披露演奏会(大阪)

コンクール各部門第2位、第3位団体
フェスタ銀賞、銅賞受賞団体

19 金 19:00

優勝団体披露演奏会(大阪)

コンクール各部門第1位団体
フェスタメニューイン金賞受賞団体

21 日 14:00

コンクール優勝団体披露演奏会(東京)

コンクール各部門第1位団体

サントリーホール ブルーローズ

大阪国際室内楽コンクール&フェスタ2023の

新たな取り組み

01

過去の優勝団体のメンバーからコンクール審査委員を招聘

1993年から30年開催している実績として、既に世界の音楽界を牽引している過去のコンクール入賞団体メンバーがいます。コンクール2023の審査委員として、第1回コンクールで優勝したエッカート・ハイリガーズ(トリオ・ジャン・ポール)、第2回コンクールで優勝したモニカ・ヘンシェル(ヘンシェル・クアルテット)、第3回コンクールで優勝したアラスデア・ティト(元ベルチャ・クアルテット)を招聘しました。

第1回コンクール
トリオ・ジャン・ポール第2回コンクール
ヘンシェル・クアルテット第3回コンクール
ベルチャ・クアルテット

02

海外の室内楽コンクールやフェスティバルとの提携協力 ▶ p20

ボルドー弦楽四重奏フェスティバル(フランス)、ストリング・クアルテット・ビエンナーレ・アムステルダム(オランダ)、VdSQ & Festival4(ドイツ)と提携協力をを行い、特別賞を創設しました。各特別賞を受賞した団体が各地のフェスティバルに参加出来ることで、コンクール参加後もキャリア支援を継続します。



03

望月京作曲の大坂国際室内楽コンクール委嘱作品 ▶ p26

コンクール第1部門3次予選の課題曲として、大阪国際室内楽コンクールが2020年に委嘱した作品「Boids again」が演奏されました。未来をつくる現代の作曲家の作品が、ライブストリーミングを通して世界に発信されました。

04

フェスタ1次ラウンドを富山と三重で開催

多彩な室内楽の魅力、愉しみを味わうことのできるフェスタの1次ラウンドを、5/13(土)富山県高岡文化ホール、5/14(日)三重県文化会館で開催しました。各地の聴衆にフェスタの音楽を届けただけでなく、参加団体が大阪以外の都市に足を運ぶ良い機会になりました。



05

地域プログラム「大阪チェンバーミュージック・ホライゾン2023」 ▶ p25

室内楽の祭典として音楽をコンクール会場だけでなく様々な場所で発信するため、コンクール&フェスタ開催期間中に地域と協働したコンサートを開催しました。コンクール参加団体が住友生命いずみホールを飛び出して、大阪市内で室内楽の魅力を披露しました。

コンクール第1部門

演奏部門	弦楽四重奏
参加資格	国・地域に関係なく1984年5月1日以降に出生したものによって編成される演奏団体。
課題曲	

◇ 1次予選

次の[1]と[2]の2曲を演奏する。なお、演奏順は自由とする。

[1]次の作曲家の作品から1曲を選択して演奏する。

L.v.ベートーヴェン：弦楽四重奏曲 op. 18(第1番～第6番のいずれか1曲)(Bärenreiter, Henle)

[2]次の作曲家の作品から1曲を選んで演奏する。

A. ウェーベルン：弦楽四重奏のための5つの樂章 op. 5

G. クルターグ：弦楽四重奏曲 op. 1

◇ 2次予選

次の[1]と[2]の2曲を演奏する。なお、演奏順は自由とする。

(上限時間は概ね60分程度。60分に満たない選曲も可)

[1]次の作曲家の作品から1曲を選択して演奏する。

F. シューベルト：弦楽四重奏曲 第13番 D804、第14番 D810 (Bärenreiter)

F. メンデルスゾーン：弦楽四重奏曲 第3番 op. 44-1、第4番 op. 44-2、第5番 op. 44-3

R. シューマン：弦楽四重奏曲 第1番 op. 41-1、第2番 op. 41-2、第3番 op. 41-3

J. ブラームス：弦楽四重奏曲 第1番 op. 51-1、第2番 op. 51-2、第3番 op. 67

A. ドヴォルザーク：弦楽四重奏曲 第13番 op. 106、第14番 op. 105

C. ドビュッシー：弦楽四重奏曲 op. 10

M. ラヴェル：弦楽四重奏曲

D. ショスタコーヴィチ：弦楽四重奏曲 第9番 op. 117、第10番 op. 118、第11番 op. 122、第12番 op. 133

[2]次の作曲家の作品から1曲を選んで演奏する。

B. バルトーク：弦楽四重奏曲 第4番 Sz. 91、第5番 Sz. 102

A. シェーンベルク：弦楽四重奏曲 第3番 op. 30、第4番 op. 37

A. ベルク：弦楽四重奏曲 op. 3、抒情組曲

S. プロコフィエフ：弦楽四重奏曲 第1番 op. 50、第2番 op. 92

B. ブリテン：弦楽四重奏曲 第2番 op. 36

H. デュティユー：「夜はかくの如し」

G. リゲティ：弦楽四重奏曲 第1番、第2番

I. クセナキス：「テトラス」

E. カーター：弦楽四重奏曲 第2番、第5番

武満 徹：「ア・ウェイ・ア・ローン」

西村 朗：弦楽四重奏曲第6番

細川俊夫：「沈黙の花」

◇ 3次予選

次の[1]と[2]の2曲を演奏する。なお、演奏順は自由とする。

[1]望月 京：「Boids again」

[2]次の作曲家の作品から1曲を選択して演奏する。

L.v.ベートーヴェン：弦楽四重奏曲 第7番 op. 59-1、第8番 op. 59-2、第9番 op. 59-3、第10番 op. 74、第11番 op. 95 (Bärenreiter, Henle)

◇ 本選

次の作曲家の作品から1曲を選択して演奏する。

L.v.ベートーヴェン：弦楽四重奏曲 第12番 op. 127、第13番 op. 130、第14番 op. 131、第15番 op. 132、第16番 op. 135 (Bärenreiter, Henle)
※第13番 op. 130の終楽章は、大フーガ op. 133へ変更しても可。

F. シューベルト：弦楽四重奏曲 第15番 D887 (Bärenreiter)

1次予選 5/12(金)

2次予選 5/14(日)

3次予選 5/16(火)

本選 5/18(木)

☆ストリング・カルテット・ピエンナーレ
アムステルダム賞
★ボルドー弦楽四重奏フェスティバル賞
△MK記念会特別賞
▲大阪国際室内楽コンクール2023
アンバサダー賞

団体名	1次結果	2次結果	3次結果	本選結果
アスト・カルテット	○			
ほのカルテット	○	○	○	2位▲
カルテット・インダコ	○	○	○	1位☆△
マリオン・カルテット	○	○		▲
ミラ・カルテット				
モーザー弦楽四重奏団	○			▲
ラサ弦楽四重奏団				
タレイア・カルテット	○	○		★
テラ弦楽四重奏団	○	○	○	3位
ヴィヴァーチェ・カルテット	○			



アスト・カルテット
(ドイツ)



モーザー
弦楽四重奏団
(スイス)



ほのカルテット
(日本)



カルテット・インダコ
(イタリア)



マリオン・カルテット
(ドイツ)



ミラ・カルテット
(中国)



テラ弦楽四重奏団
(アメリカ)



ヴィヴァーチェ・
カルテット
(中国)

コンクール第2部門

演奏部門 ピアノ三重奏／四重奏

参加資格 国・地域に関係なく1984年5月1日以降に出生したものによって編成される演奏団体。

課題曲

●ピアノ三重奏

◇1次予選

次の[1]と[2]の2曲を演奏する。なお、演奏順は自由とする。

[1]次の作曲家の作品から1曲を選んで演奏する。

F. J. ハイドン：ピアノ三重奏曲 Hob. XV-24, 25, 26, 27, 28, 29

W. A. モーツアルト：ピアノ三重奏曲 K. 496, 502, 542, 548, 564

L. v. ベートーヴェン：ピアノ三重奏曲 第1番 op. 1-1, 第2番 op. 1-2, 第3番 op. 1-3

[2]次の作曲家の作品から1曲を選んで演奏する。

細川俊夫：「トリオ」(2013年、<2017年改訂>) (Schott Japan)

E. カーター：「エピグラムス」(2012)

W. リーム：「見知らぬ土地の情景」I 又は III (1982-1984)

◇2次予選

次の[1]と[2]の2曲を演奏する。なお、演奏順は自由とする。

[1]次の作曲家の作品から1曲を選択して演奏する。

J. ブラームス：ピアノ三重奏曲 第1番 op. 8
(1889年改訂版)、第2番 op. 87、
第3番 op. 101

F. メンデルスゾーン：ピアノ三重奏曲 第1番 op. 49、
第2番 op. 66

R. シューマン：ピアノ三重奏曲 第1番 op. 63、
第2番 op. 80、第3番 op. 110

A. ドヴォルザーク：ピアノ三重奏曲 第3番 op. 65、
第4番 op. 90

B. スメタナ：ピアノ三重奏曲 op. 15

C. サン=サーンス：ピアノ三重奏曲 第1番 op. 18

M. ラヴェル：ピアノ三重奏曲

E. ショーソン：ピアノ三重奏曲 op. 3

A. アレンスキイ：ピアノ三重奏曲 第1番 op. 32

[2]次の作曲家の作品から1曲を選択して演奏する。

C. アイヴス：ピアノ三重奏曲 (1910)

D. ショスタコヴィチ：ピアノ三重奏曲 第2番 op. 67
(1947)

Y. ヘラー：「白昼夢」(1994) (Boosey & Hawkes)

M. ワインベルク：ピアノ三重奏曲 op. 24 (1945)

B. マルティナー：ピアノ三重奏曲 第2番 (1950)、
第3番 (1951)

P. ヴァスクス：「エピソードと終わりなき歌」(1985)

◇本選

次の[1]と[2]の2曲を演奏する。なお、演奏順は自由とする。

[1]次の作曲家の作品から1曲を選択して演奏する。

L. v. ベートーヴェン：ピアノ三重奏曲第7番 op. 97

F. シューベルト：ピアノ三重奏曲 第1番 D898、第2番 D929

[2]次の日本人作曲家の作品を演奏する。

武満徹：「ビトウーン・タイズ」(1993) (Schott Japan)

1次予選 5/13(土)

2次予選 5/15(月)

本選 5/18(木)

△MK記念会特別賞



アルベニス・トリオ
(オランダ)



トリオ・シャガール
(スイス)



トリオE.T.A.
(ドイツ)



トリオ・
ガイア
(アメリカ)



トリオ・
ミケランジェリ
(ドイツ)



トリオ・オレロン
(ドイツ)

団体名	1次結果	2次結果	本選結果
アルベニス・トリオ			
トリオ・シャガール	○		
トリオE. T. A.	○		
トリオ・ガイア			
トリオ・ミケランジェリ	○	○	3位
トリオ・オレロン	○		
トリオ・パントゥム	○	○	2位
ポルテュス トリオ	○		
ソレリ・トリオ			
カピバラ・ピアノ・カルテット	○	○	1位△
ウェルテル・ピアノ・カルテット			



トリオ・パントゥム
(フランス)



ポルテュス トリオ
(日本)



ソレリ・トリオ
(ドイツ)



カピバラ・ピアノ・
カルテット
(ドイツ)



ウェルテル・ピアノ・
カルテット
(イタリア)

フェスタ

ヴァイオリニストで教育家のユーディ・メニューイン卿の提唱により、大阪国際室内楽コンクールとともに始まった大阪国際室内楽フェスタ。年齢制限や課題曲がなく、楽器の種類や編成も自由です。このため、クラシック音楽はもとより、世界各地の民族楽器も対象となります。そして、一般審査員の投票によって審査が行われ、第1位のアンサンブルには第1回～第3回コンクール＆フェスタで名誉芸術監督を務めたメニューイン卿への敬意を込めて、「メニューイン金賞」が授与されます。

楽器編成 2人から6人までの器楽アンサンブル。楽器の組み合わせは自由。

クラシック音楽だけでなく、世界各地の民族楽器も対象となる。

参加資格 国・地域、年齢に関係なく応募できる。

課題曲 課題曲はなし。各ラウンド5曲以内で、演奏時間は25分以内とする。

審査方法

◇ 1次ラウンド 1st round

予備審査に通過した12団体が2会場に分かれて出場する。各会場に出場する6団体を2ブロックに分け、ブロック単位でフェスタ審査員の得票が最多の団体が、セミファイナルに進出する。また、各ブロックで2位となった団体の中から、1位の団体との差が最少の団体もセミファイナルに進出する。

◇ セミファイナル Semifinal round

出場する6団体を3ブロックに分け、ブロック単位でフェスタ審査員の得票が多い団体が、ファイナルに進出する。

◇ ファイナル Final round

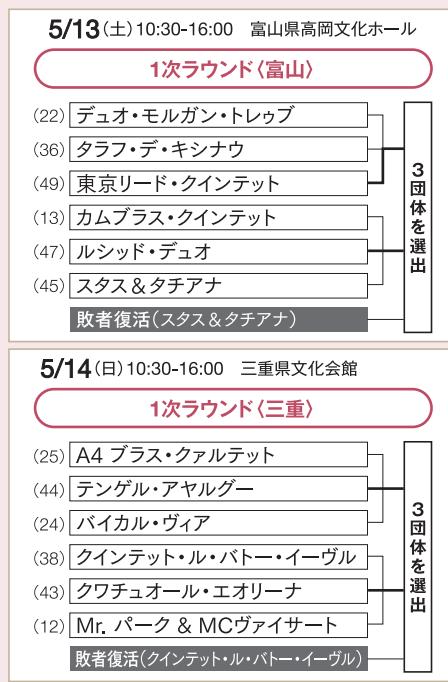
出場する3団体の中でフェスタ審査員の得票が最多の団体を、メニューイン金賞受賞とする。

その他

* 各ブロックの最多得票数が同数となった場合は、審査員長と副審査員長が協議の上、次のラウンドに進む団体を選出する。

また審査員長/副審査員長が、出場団体の演奏が本要項に沿わない内容と判断した時は、減点することができる。

* フォーコロア特別賞は、審査員長、副審査員長が、セミファイナル進出団体から選出する。



※()内の数字は得点です。

1次ラウンド(富山)



デュオ・モルガン・トレウブ(オランダ)
[ピアノ、ヴァイオリン]



カムプラス・クインテット(スイス)
[トランペット×2、フレンチホルン、トロンボーン、チューバ]



ルシッド・デュオ(オーストリア)
[マリンバ×2]



スタス & タチアナ(アメリカ)
[バヤン、ダルシマー]



タラフ・デ・キシナウ(モルドバ)
[ヴァイオリン、コブザ、コントラバス、アコーディオン]



東京リード・クインテット(日本)
[オーボエ/イングリッシュホルン、クラリネット、バスクラリネット、ソプラノサクソフォーン、ファゴット]

1次ラウンド(三重)



A4 ブラス・カルテット(イギリス)
[コルネット/フリューゲルホルン、テナーホルン、バリトンホルン、ユーフォニアム]



バイカル・ヴィア(ロシア)
[ドムラ×2、コントラバスバラライカ]



Mr. パーク & MC ヴァイサー(ドイツ)
[ピアノ×2]



クワチュオール・エオリーナ(フランス)
[アコーディオン×4]



クインテット・ル・バトー・イーヴル(フランス)
[フルート、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、ハープ]



テンゲル・アヤルグー(モンゴル)
[ヨーチン、リンペ、エベルブレー、馬頭琴、バス馬頭琴]

第1部門 入賞団体



第1位 クアルテット・インダコ(イタリア)
Quartetto Indaco

ヴァイオリン:エレオノラ・マツノ
ヴァイオリン:イダ・ディ・ヴィータ
ヴィオラ:ジャミアング・サンティ
チェロ:コジモ・カロヴァニ



クアルテット・インダコは、今日、同世代のイタリアの弦楽四重奏団の中でも特に注目を集めているアンサンブルであるとみなされている。フィエーザ音楽院とハノーファー音楽演劇大学(オリバー・ヴィレの指導のもと、室内楽の修士号を取得)を卒業後、キジアナ音楽院でギュンター・ピヒラーのマスタークラスを受講。2017年にスコッティーズ賞、プレミオ・パオロ・ボルチアーニコンクールでファイナリスト選出、マンハッタン国際コンクールゴールドメダルなど数々の国際的な賞や奨学金を獲得している。「コンパクトなアンサンブルで、エナメル質と高揚感で満ちている」と表現され、Brillant Classics、Ema Vinci、ミラノのSconfinarteなどに録音を残している。イタリアの著名な音楽祭や機関に招聘され、ヨーロッパ各地や海外でも定期的に演奏している。



第2位 ほのカルテット(日本)
HONO Quartet

ヴァイオリン:岸本 萌乃加
ヴァイオリン:林 周雅
ヴィオラ:長田 健志
チェロ:蟹江 慶行



2018年1月結成。全員東京藝術大学在学中に結成。始動半年で第4回宗次弦楽四重奏コンクールにて第3位、及びハイドン賞受賞(課題曲賞)。2019年5月、第8回秋吉台音楽コンクール弦楽四重奏部門にて第1位受賞。2021年度プロジェクトQ第19章に参加。サントリー室内楽アカデミー7期フェロー。2020年より現在松尾学術振興財団の奨学金を受ける。これまでに松原勝也、市坪俊彦の各氏に師事。現在山崎伸子女師の元で研鑽を積んでいる。



第3位 テラ弦楽四重奏団(アメリカ)
Terra String Quartet

ヴァイオリン:ハリエット・ラングリー
ヴァイオリン:アメリア・ディートリック
ヴィオラ:ラモン・カレロ・マルティネス
チェロ:オードリー・チェン



2022年フィヨーフ室内楽コンクールにおいて、グランプリを受賞。ニューヨークを拠点とし、ジュリアード音楽院、マンハッタン音楽学校、ニューアイオニア音楽院、ハーバード大学の卒業生で結成。「並外れた成熟性と音楽性」、「絶妙なアンサンブル演奏」(ハイドパークヘラルド紙)と称賛され、世界中から集まった彼らは、情熱、自発性、ユーモアをクアルテットに吹き込むことに全力を注いでいる。米国内やカナダで活動を展開しており、クレモナ・クアルテットと共にコンサートを行う。2022年のバンフ国際弦楽四重奏コンクールでセミファイナリストに選ばれ、イースト・カロライナ大学におけるフォーシーズンズ・フェスティバルのプロフェッショナル・フェローシップ・プログラムに四重奏団として初めて参加。アラ・グレゴリアン、マーク・スタインバーグ、ダニエル・アヴシャロモフ、キャサリン・チョに師事。

第2部門 入賞団体



第1位 カピバラ・ピアノ・クアルテット(ドイツ)
Capybara Piano Quartet

ピアノ:マリオ・ヘリング
ヴァイオリン:岡田 優一
ヴィオラ:近衛 剛大
チェロ:ミンジ・キム



カピバラ・ピアノ・クアルテットはヨーロッパ中から集まつた4人の若手ソリストの出会いから誕生した。2021年に名門小澤アカデミーで原田禎夫と今井信子に指導を受ける機会を得た岡田優一、近衛剛大、ミンジ・キムが出会い、室内楽への情熱を持つ3人は、ピアニストのマリオ・ヘリングと共にクアルテットを結成することを決意。それぞれが主要な国際コンクール(ミュンヘン、ジュネーヴ、パウロ、リーズ、クライスラー、カサド)での入賞経験を持ち、ヨーロッパや海外の大舞台で定期的にソリストとして、また室内楽奏者として出演している。



第2位 トリオ・パントウム(フランス)
Trio Pantoum

ピアノ:ヴィオジル・ロッシュ
ヴァイオリン:ヒュゴ・メデール
チェロ:ボーゲン・パク



2016年パリ国立高等音楽学校で結成し、同世代で最も有望なヨーロッパの室内楽アンサンブルの一つであるという地位を確立する。トリエステ、ワイマール、リヨンなど多くの国際コンクールで入賞経験があり、フランスやヨーロッパの主要なホールで称賛を受ける。トリオ・ヴァンダラー、クレール・デゼール、ハット・バイエルレ、ヨハネス・マイスル、ギュンター・ピヒラー、アーヴィング・アルディッティ、アントニオ・メネセスに師事。2021年以来、ヨーロッパ室内楽アカデミーのアンサンブルであり、プロクアルテットのレジデントとしても活動する。クイーン・エリザベス・ミュージック・チャペルの2022-2023年のアーティスト・イン・レジデンスを務め、2023年にはフランスとイタリアでのツアーを計画しており、ハンガリー、日本、オーストラリアといった国々での初出演も予定している。



第3位 トリオ・ミケランジェリ(ドイツ)
Trio Michelangeli

ピアノ:リカルド・ガリアルディ
ヴァイオリン:パオロ・タリアメント
チェロ:アレサン德拉・ドニエリ



トリオ・ミケランジェリはヴァイオリン奏者のパオロ・タリアメント、チェロ奏者のアレサン德拉・ドニエリ、そしてピアニストのリカルド・ガリアルディの3人で、友情のみならず室内楽作品への深い愛で結ばれてミュンヘンで結成。トリオ名は3人が多大なインスピレーションを受けた偉大なピアニスト、アルトゥーロ・ベネデッティ・ミケランジェリに由来する。多面的で洗練された性格、瞑想的で普遍的、カンタービレと厳格さ、強さと繊細さをうまく調和させることのできるミケランジェリは、同世代と後世において音楽的センスを深く際立たせた。イタリアの生まれではあるが国際人である彼のスイスとの人生や芸術的な結びつきは、トリオメンバーの出身国である二つの国の結びを象徴している。現在はミュンヘン音楽演劇大学でジルケ・アヴェンハウスとラファエル・メルラン(エベヌ・クアルテット)に師事している。

大阪国際室内楽コンクール2023 特別賞

大阪国際室内楽コンクール2023では、コンクール後のキャリアを支援するために、世界各地の音楽祭等と提携した特別賞を用意しました。

■ MK記念会特別賞 ■

コンクール第1部門、第2部門の第1位受賞団体には、一般社団法人MK記念会から50万円を授与される。

受賞

クアルテット・インダコ
カピバラ・ピアノ・クアルテット



ボルドー弦楽四重奏フェスティバル賞

第1部門に参加している弦楽四重奏から1団体に授与される。

受賞した団体は、2024年5月14日から23日に開催される「ボルドー弦楽四重奏フェスティバル」に参加して、マスタークラスの受講やコンサートへ出演する。

受賞 タレイア・クアルテット



String Quartet Biennale Amsterdam

ストリング・クアルテット・ビエンナーレ・アムステルダム賞

第1部門で第1位を受賞した弦楽四重奏は、2024年1月27日から2月3日にアムステルダムで開催される「ストリング・クアルテット・ビエンナーレ・アムステルダム」に出演する。

受賞 クアルテット・インダコ



大阪国際室内楽コンクール2023アンバサダー賞

受賞した団体は、VdSQ & Festival4 (www.vdsq.de) が2024年12月13日から14日に開催する室内楽フェスティバル「Mensch-Klang-Raum」に、本コンクールのアンバサダーとして出演する。

受賞 ほのカルテット
マリオン・クアルテット
モーザー弦楽四重奏団

フェスタ 入賞団体



メニュイーン
金賞
TENGER AYALGU

ヨーチン:バダルチ・バトルシフ
リンベ:ツエベグスレン・ツェレンバルジル
エペルプレー:ジュルメドルジ・ノルドグ
馬頭琴:テムージン・プレブナー
バス馬頭琴:ムンフェルデネ・エルデネバト



テンゲル・アヤルグーは1997年にモンゴル国立文化芸術大学の生徒と卒業生によるモンゴルのエスニック音楽五重奏団として結成され、古代文字に記録されたモンゴルの伝統的な民俗芸術の保存と普及の活動を行ってきた。結成以来、日本、韓国、台湾、ロシア、ハンガリー、フィンランド、イタリア、そしてアメリカといった国々で演奏活動を行い、国際的な音楽祭やコンクールで受賞経験がある。また、CDアルバム、ミュージックビデオをリリースし、楽曲編曲に関する書籍も出版している。メンバーの多くは大学教授であり、コンサートでの演奏だけではなく、調査活動にも従事している。



銀賞
クインテット・ル・バトー・イーヴル
(フランス) Quintette Le Bateau Ivre

フルート:サミュエル・カザレ
ヴァイオリン:セレナ・マンガナス
ヴィオラ:ヴァロンタン・チャペロ
チェロ:ケヴィン・ブルダ
ハープ:ジョン・バティスト・エイヤ



ル・バトー・イーヴルは2015年結成後すぐにその高いクオリティで注目され、2016年にパリのレオポルド・ベランコンクールで優勝。さらに2017年と2018年に日本とイタリアで2度にわたって第3位を受賞し、国際的に高い評価を受けた。パリ国立高等音楽学校でミッシェル・モラグスに師事し、室内楽の修士号を取得、2019年にはECMAプログラムに参加。現在は定期的にヨーロッパ内で演奏活動を行っている。2020年ブサンソノーケストラと共に演奏し、五重奏とオーケストラのための協奏曲を創作。2022年10月にInitialeレーベルからファーストアルバム『Marionnettes』をリリース。



銅賞
スタス&タチアナ(アメリカ)
Stas & Tatyana

バヤン:スタス・ヴェングレフスキ
ダルシマー:タチアナ・クラスノバエヴァ



スタス・ヴェングレフスキとタチアナ・クラスノバエヴァは2017年に結成したバヤンとチンバロンダルシマーのデュオ。2017年にアメリカ中西部12都市でのツアーを果たす。以来、ワシントンDCのジョン・F・ケネディセンターを含むアメリカ国内の都市、フランス、スイス、そしてロシアで演奏活動を行う。レパートリーはクラシックから現代曲、オリジナル曲、民族曲など多岐にわたる。2枚のCD、『9 Days』と『Dance Me...』をリリース。



テンゲル・アヤルグー

セミファイナル出場団体の中で特に伝統音楽、民族音楽に優れた団体に対して20万円が授与される。



クワチュオール・エオリーナ、テンゲル・アヤルグー
東京リード・クインテット

セミファイナル出場団体の中で、事前に公募されたオンライン審査員による投票が最も多かった団体に対して10万円が授与される。
※同点だったため、3団体に対して分割して授与されました。



歓迎パーティー

5/11 木

18:00~20:00
ホテルニューオータニ大阪18F
サンセットの間

式次第

司会 足立 夏保(読売テレビアナウンサー)
通訳 寺田 瑞穂

挨拶

日本室内楽振興財団 会長
松本 正義

挨拶・乾杯

日本室内楽振興財団 理事長
大橋 義光

挨拶

コンクール審査委員長
堤 剛

司会者より審査委員紹介



コンクール審査委員歓迎の為のウェルカム・パーティー。来日後に体調を崩され、審査委員をキャンセルされたウェイガン・リ先生は欠席されましたが、堤剛審査委員長以下9名の審査委員の皆さんのが一堂に集い、翌日から始まるコンクールを前に和やかに歓談されていました。日本室内楽振興財団や協賛各社、読売テレビ関係者ら21名が参加しました。



記念パーティー & 表彰式



記念パーティー & 表彰式

5/18 木

20:00~21:30
ホテルニューオータニ大阪2F
鳳凰の間

式次第

司会 足立 夏保(読売テレビアナウンサー)
通訳 寺田 瑞穂

挨拶

日本室内楽振興財団 会長
松本 正義

挨拶・乾杯

日本室内楽振興財団 理事長
大橋 義光

司会者より審査委員紹介



表彰

第1部門(弦楽四重奏)

第1位、第2位、第3位
MK記念会特別賞
ストリング・クアルテット・ピエンナーレ・アムステルダム賞
ボルドー弦楽四重奏フェスティバル賞
■表彰状/賞金/メダル/盾の授与
堤剛コンクール審査委員長
大阪国際室内楽コンクール2023アンバサダー賞
■盾の授与
モニカ・ヘンシェル コンクール副審査委員長

第2部門(ピアノ三重奏/四重奏)

第1位、第2位、第3位
MK記念会特別賞
■表彰状/賞金/メダル/盾の授与
堤剛コンクール審査委員長

フェスタ

メニューイン金賞、銀賞、銅賞
フォークロア特別賞、オンライン聴衆賞
■表彰状/賞金/メダル/盾の授与
吳信一フェスタ審査委員長

審査総評

コンクール審査委員長
堤 剛

コンクール、フェスタ両部門を通じて応募数が多く、今回は特に応募団体の水準が高かったため、予備審査の時点から悩みました。参加33団体の演奏を耳にして、「若さって素晴らしいな」「室内楽って素晴らしいな」という気持ちを強く持ちました。若さの持つエネルギー、情熱、音楽に対する愛が演奏に現れていて、私たち審査委員も非常に心を動かされました。また、

世界トップレベルの審査委員に大阪に来ていただけたことは、成功の一つの要因だったと思います。今回素晴らしいコンクールを実施できたことは、大変意義がある歴史的のことであったと思います。大阪から世界へ発信するという、国際交流という意味でも大きな貢献ができたことに感謝申し上げます。

披露演奏会

入賞団体披露演奏会

5月19日(金)14:00開演／住友生命いづみホール

順位	演奏団体 (演奏順に記載)
----	---------------

フェスティバル賞 スタス&タチアナ(アメリカ)

V. ラドウ:スプリング・クワイア

V. ガブリーリン:タランテラ

E. グレボフ:アダージョ

民謡変奏曲:ウクライナ民謡

第2部門 第3位 トリオ・ミケランジェリ(ドイツ)

[演奏曲目] M. ワインベルク:ピアノ三重奏曲 op. 24 第1・第2楽章

第1部門 第3位 テラ弦楽四重奏団(アメリカ)

[演奏曲目] L. v. ベートーヴェン:弦楽四重奏曲 第9番 op. 59-3 第3・4楽章

フェスティバル賞 クインテット・ル・バトー・イーヴル(フランス)

[演奏曲目] J. ジョンソン:五声のコンセール 第1楽章

第2部門 第2位 トリオ・パントム(フランス)

[演奏曲目] M. ラヴェル:ピアノ三重奏曲 第1・第2楽章

第1部門 第2位 ほのカルテット(日本)

[演奏曲目] L. v. ベートーヴェン:弦楽四重奏曲 第11番 op. 95

優勝団体披露演奏会

5月19日(金)19:00開演／住友生命いづみホール

順位	演奏団体 (演奏順に記載)
----	---------------

フェスティバル賞 テンゲル・アヤルグー(モンゴル)

エ. チョイドグ:美しいモンゴルについて

テンゲル・アヤルグー:古代モンゴル史について

W.A.モーツアルト:トルコ行進曲(ロンド)

ジェ・メンダマル:モンゴル人についてモンゴル民族歌

第2部門 第1位 カピバラ・ピアノ・クァルテット(ドイツ)

[演奏曲目] G. フォーレ:ピアノ四重奏曲 第2番 op. 45

第1部門 第1位 クァルテット・インダコ(イタリア)

[演奏曲目] L. v. ベートーヴェン:弦楽四重奏曲 第10番 op. 74

コンクール優勝団体披露演奏会

5月21日(日)14:00開演／サントリーホール ブルーローズ

順位	演奏団体 (演奏順に記載)
----	---------------

第2部門 第1位 カピバラ・ピアノ・クァルテット(ドイツ)

細川俊夫:レテの水(2015)

J. ブラームス:ピアノ四重奏曲 第3番 op. 60

第1部門 第1位 クァルテット・インダコ(イタリア)

[演奏曲目] F. シューベルト:弦楽四重奏曲 第15番 D887



大阪チェンバーミュージック・ホライゾン2023

日本室内楽振興財団では、住友生命いづみホールで開催されるコンクール&フェスタを運営するだけでなく、より多くの方に室内楽に親しんでいただくために、様々な関連事業を開催しています。コンクール&フェスタの審査で芸術の高みを目指すとともに、関連事業で幅広い方に親しんでもらうことで裾野を広げ、より一層室内楽の振興を図りました。

今回は、大阪国際室内楽コンクール&フェスタ2023地域プログラム「大阪チェンバーミュージック・ホライゾン2023 in 読売テレビ」と「大阪チェンバーミュージック・ホライゾン2023 in 今福音楽堂」として、大阪国際室内楽コンクール2023参加団体が地域と協働したコンサートを開催しました。

■会場 ■読売テレビ1F 10plaza ytv

| 5/15 月 12:00 開演

出演団体

ラサ弦楽四重奏団(アメリカ)

曲目

M. ラヴェル:弦楽四重奏曲

S. プロコフィエフ:弦楽四重奏曲
第2番 op. 92

■会場 ■今福音楽堂

| 5/15 月 19:00 開演

出演団体①

アスト・クアルテット(ドイツ)

曲目

A. ウェーベルン:弦楽四重奏のための
5つの楽章 op. 5L. v. ベートーヴェン:弦楽四重奏曲
第9番 op. 59-3

出演団体②

トリオ・ガイア(アメリカ)

曲目

武満徹:ビトウェイン・タイズ

L. v. ベートーヴェン:ピアノ三重奏曲
第1番 op. 1-1

出演団体①

ウェルテル・ピアノ・クアルテット
(イタリア)

曲目

L. v. ベートーヴェン:ピアノ四重奏曲
op. 16

W. オルトン:ピアノ四重奏曲

出演団体②

アルベニス・トリオ(オランダ)

曲目

L. v. ベートーヴェン:ピアノ三重奏曲
第3番 op. 1-3D. ショスタコーヴィチ:ピアノ三重奏曲
第2番 op. 67

| 5/16 火 19:00 開演

出演団体①

トリオ・シャガール(スイス)

曲目

F. J. ハイドン:ピアノ三重奏曲
Hob. XV-27

M. ラヴェル:ピアノ三重奏曲

出演団体②

モーザー弦楽四重奏団(スイス)

曲目

L. v. ベートーヴェン:弦楽四重奏曲
第15番 op. 132



大阪国際室内楽コンクール委嘱作品（第1部門3次予選課題曲）

望月京：ボイズ・アゲイン Misato Mochizuki : Boids again (2019/20)

コンポーザーズ・ノート

2年前、ローマで遭遇したムクドリの大群が一体となって自在に変化する形状美に圧倒され、しばし目を奪われました。水族館などで見る、魚の群れが生み出す形状変化も同様に驚異的です。

あの精緻な群れの動きは、

- 1)ぶつからないように距離をとる
- 2)速度と方向を合わせる
- 3)群れの中心方向へ向かうように方向を変える

というシンプルな3原則によって生み出されているそうです。

いわば、規則と個々の自由なふるまいとのバランスの成果である群れの動きの美は、弦楽四重奏のありかたにも共通するのではないかと思い、『Boids』(鳥もどき“Bird-oid”からとられた名称)という小練習曲を2018年に作曲しました。

これはその続編ということで『Boids again』と名付けています。

望月京 2020年



望月京 作曲家

東京藝術大学、同大学院およびパリ国立高等音楽院作曲科、楽曲分析科修了。さまざまな領域への関心からもたらされる着想や、繊細さとダイナミズム、多彩な音色とバランス感覚に優れたユニークな作風が各地で注目を集め、オペラ『パン屋大襲撃』、管弦楽曲《むすび II》(ザンソン国際指揮者コンクール課題曲)など、国内外より委嘱された作品はザルツブルク音楽祭、ヴェネツィア・ビエンナーレ、パリの秋芸術祭、リンカーンセンター・フェスティバル、サントリーホールなどで演奏されている。芥川作曲賞、出光音楽賞、芸術選奨文部科学大臣新人賞、尾高賞、ハイデルベルク女性芸術家賞などを受賞。内外の国際作曲セミナー、コレージュ・ド・フランス、ニューヨーク・コロンビア大学、アムステルダム音楽院等で講師を務め、現在、明治学院大学教授、東京藝術大学客員教授。読売新聞(2008~2015)や日本経済新聞(2013、2018)ではコラムを連載するなど幅広く活動している。2019年、日本経済新聞連載コラムをまとめたエッセイ集『作曲家が語る音楽と日常—パリと日本を行き来して—』(海竜社)を上梓。

ディスカッションセッション



3次予選に進んだ弦楽四重奏の5団体は、演奏前日に望月京さんと25分ずつディスカッションセッションの時間が設けられました。セッションでは楽譜の解釈や演奏方法などについて作曲者本人と確認し、最後の入念な準備に取り組みました。

プレトーク



5月16日の3次予選演奏の前には、舞台上で望月京さんによるプレトークが開催されました。作曲家にとって弦楽四重奏曲に取り組む意義や、今回「ボイズ・アゲイン」を作曲するに至った経緯をお話しいただきました。

審査委員からの講評

コンクールの運営上、審査期間中は参加団体と審査委員の接触は禁じられていますが、惜しくも次のラウンドに進むことが出来なかった団体に対し、審査委員から演奏に対する講評を伝えました。結果発表後にはロビーで参加団体が審査委員を囲み、熱心に講評を聞き入る姿が見られました。



インターネットによるライブ配信

大阪国際室内楽コンクール&フェスタでは第8回(2014年)からインターネットでのライブ配信を行っています。前回に引き続き今回もYouTubeを通じて大阪、富山、三重での全ラウンドを配信したのに加え、コンクール第1部門はアメリカのオンラインメディア「The Violin Channel」のウェブサイト、SNSで配信を行いました。

YouTubeでは、ライブ配信終了後からアーカイブ配信も行われています。



入場者数とライブ配信視聴数

日程	区分	入場者数	YouTubeリアルタイム視聴者数
5/12(金)	コンクール第1部門1次予選	139	1653
5/13(土)	コンクール第2部門1次予選 フェスタ1次ラウンド(富山)	91 158	1513 560
5/14(日)	コンクール第1部門2次予選 フェスタ1次ラウンド(三重)	117 132	2077 659
5/15(月)	コンクール第2部門2次予選	100	1207
5/16(火)	コンクール第1部門3次予選	111	872
5/17(水)	フェスタセミファイナル／ファイナル	131	1208
5/18(木)	コンクール本選	132	2522
5/19(金)	コンクール＆フェスタ入賞団体披露演奏会(大阪) コンクール＆フェスタ優勝団体披露演奏会(大阪)	164 204	配信なし 配信なし
5/21(日)	コンクール優勝団体披露演奏会(東京)	179	配信なし

音楽関係者の来場

今大会では、国際音楽コンクール世界連盟のフロリアン・リーム事務局長、ホノルル室内楽協会、音楽ライターのロバート・マルコウ氏など、海外からの音楽関係者の来場、また国内の音楽ホール、財団、音楽ライター等の来場も多くありました。



フロリアン・リーム氏

記者発表／記者会見



2023年3月22日(水)15:00
ホテルニューオータニ大阪「ニューヨークスワン」

[主催者側出席者]

開催委員会会長	松本 正義 日本室内楽振興財団会長、関西経済連合会会長
開催委員会副会長	大橋 善光 日本室内楽振興財団理事長、読売テレビ放送社長
コンクール審査委員長	堤 剛 チェロ、サントリー芸術財団代表理事
フェスタ審査委員長	吳 信一 トロンボーン、京都市立芸術大学名誉教授
運営本部長	牧野 立太 日本室内楽振興財団常務理事
総合プロデューサー	河井 拓 日本室内楽振興財団



関西及び首都圏の新聞・雑誌記者、音楽ライターほか音楽関係者合計25名が出席しました。

堤剛コンクール審査委員長、吳信一フェスタ審査委員長からは、予備審査を経ての所感を、総合プロデューサーより予備審査に合格した参加予定団体の発表を中心に、今大会の特徴や新しい取り組み等を説明しました。



2023年5月19日(金)15:00
ホテルニューオータニ大阪「ウイステリア」



[主催者側出席者]

コンクール審査委員長	堤 剛	チエロ、サントリー芸術財団代表理事
コンクール副審査委員長	モニカ・ヘンシェル	ヴィオラ、ヘンシェル・クアルテット
司会 総合プロデューサー	河井 拓	日本室内楽振興財団
通訳	寺田瑞穂	

[出席団体]

コンクール 第1部門 弦楽四重奏	第1位受賞団体 クアルテット・インダコ
コンクール 第2部門 ピアノ三重奏／四重奏	第1位受賞団体 カピバラ・ピアノ・クアルテット
フェスタ(2-6名の器楽アンサンブル)	メニューイン金賞受賞団体 テンゲル・アヤルグー



国内および海外の新聞・雑誌記者、音楽ライターほか音楽関係者合計17名が出席しました。

コンクール&フェスタで優勝した3団体が登壇し、記者・ライターとの質疑応答を行いました。堤剛コンクール審査委員長、モニカ・ヘンシェルコンクール副審査委員長からは、今大会に審査員として参加した所感を伺いました。

※今大会では、参加団体募集にあたり記者発表は行わず、発表情報のリリースとともに動画によるコメントを発表しました。

サウンドチェック／練習場／ボランティアスタッフ

●参加団体によるサウンドチェック

5月11日(開催日の前日)に住友生命いずみホールでサウンドチェックの時間を設定し、コンクール参加団体が約15分間ステージ上で演奏し、ホールの音響等を確認しました。

●練習場

全ての参加団体には1次予選(フェスタは1次ラウンド)の前日から披露演奏会の日まで、1日3時間練習が出来るように練習場を確保しています。短期間に多くの練習場を必要とすることと、楽器の特性に合わせた練習場を確保する必要があること等で、事前の準備が重要です。今回は練習場を大阪フィルハーモニー会館と今福音音楽堂の2カ所に絞り、ご協力をいただきました。

練習場名	所在地	ピアノの使用	利用日数	延べ利用時間
大阪フィルハーモニー会館	大阪市西成区	○	7日	70時間
今福音音楽堂	大阪市鶴見区	○	2日	16時間



●ボランティアスタッフの協力

今回も(公財)大阪府国際交流財団のご協力を得て、ボランティアスタッフの方々にコンクールの運営で協力いただきました。ボランティアの募集は、大阪府国際交流財団が3月上旬にボランティア募集を掲載し、応募のあった40名の中から、コンクール日程で都合の合う19名の方々に協力いただきました。尚、4月27日(木)には、コンクール会場(住友生命いずみホール)で事前説明会を実施し、練習場である大阪フィルハーモニー会館での業務説明も行いました。

《練習場サポート》

コンクール開始の前日から、練習場でスタンバイするサポートで、延べ18名の方に協力いただきました。

《会場サポート》

コンクール会場内での参加者の移動(控室、リハーサル室、ステージ袖)のサポートで、延べ30名の方に協力いただきました。



フェスティ一般審査員の募集

フェスティの一般審査員の募集は以下の通り実施しました。今回初めて1次ラウンドを他都市開催するため、前年のグランプリ・コンサート代替公演打楽器集団「男群」の全国ツアーにおいて、メンバーから一般審査員制度の紹介を行い、その場で申し込めるよう申込書を配布するなどの取り組みを行いました。

また、応募してくださった方は日本室内楽振興財団の無料DM会員制度奏メンバーズの会員になっていただく導線も作り、コンクール&フェスタ2023終了後も継続して応援していただけた仕組みを作りました。

■募集期間

- ①先行募集 2022年10月28日～12月16日
- ②一般募集 2023年2月1日～3月31日
- ③オンライン審査員追加募集 2023年4月1日～21日

■応募方法

ファックスまたはオンラインフォーム

審査員参加数

- 5月13日(土) 1次ラウンド富山 107名
- 5月14日(日) 1次ラウンド三重 93名
- 5月17日(水) セミファイナル／ファイナル 会場199名／オンライン 59名



■ フェスティオンライン審査員へのアンケート

今回新たに実施したオンライン審査について、審査参加者にアンケートを行いました。

- 様々な楽器のアンサンブルが楽しめましたが、弦楽四重奏やピアノ三重奏、四重奏も聴いてみたいと思いました。
- 自分の投票したものと結果が異なったが、感じ方に色々あることが分かった。
- 人数が少なく、審査の正確さに疑問を感じます。記念品がなくとも応募する人はいると思うのもっと大勢に審査してもらうようにできないでしょうか。
- 遠出出来ないけれど、興味のある私のような人にとって、とてもありがたく楽しい企画でした。イヤホンで聴いていたので、いずみホールで聴く感じとほとんど変わらない音質で聴く事ができたことも、多彩な音楽を味わえたことも嬉しかったです。素晴らしい企画をありがとうございました。今後も是非開催してください。
- オンラインでの審査は、手軽ではあったが、審査員それぞれの機材環境によっては音質の変化があるため、適切な審査が難しいと同時に感じました。
- リアル会場とは伝わるもののが違う感じはありました、オンラインでも思ったより音楽を通して伝わってくるものがありました。会場の拍手の音、大きさも感じられて、リアル会場の皆さんにはこの演奏が素晴らしいと感じたのかな?と思ったりしていました。オンライン審査の手順や、最後の結果までメールで丁寧に説明があり、分かりやすかったですとともに満足感がありました。演奏の方はいろんな楽器があり、楽しく聞かせて頂きました。最後、



進行日程

コンクール&フェスタ2023は、2020年開催予定で中止となってしまった「第10回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」の基本的な枠組みを踏襲して開催いたしました。

2020年	3月	第10回コンクール&フェスタ「見送り」決定
	4月	2021年5月に第10回コンクール&フェスタを「延期」開催することを決定
2021年	3月	第10回コンクール&フェスタ「中止」決定
	7月	コンクール審査委員長、審査委員 フェスティ審査員長、副審査員長への就任依頼
	8月	コンクール&フェスタ2023開催の発表
	12月	コンクール&フェスタ顧問への就任依頼 コンクール&フェスタ後援団体への名義申請
2022年	1月	コンクール専門委員、フェスティ専門委員への就任依頼
	3月	募集要項完成
	28日 ～ 9月	参加団体募集開始プレスリリース 国内外のメディアなどに募集のための広告掲載
	5月	参加団体募集開始
	9日	コンクール予備審査委員、フェスティ予備審査員への就任依頼 練習場の申込
	7月	世界情勢を鑑み応募団体からの申込料を廃止 (予備審査通過団体からのみ参加料を徴収に変更)
	8月	コンクール専門委員会開催
	1日	フェスティ専門委員会開催
	18日	参加団体募集締切
	10月	コンクール第2部門予備審査実施(48団体)
	11月	コンクール第1部門予備審査実施(29団体)
	2日 ～ 3日	コンクール応募団体に予備審査結果通知
	4日 ～ 5日	フェスティ予備審査実施(84団体)
	未	フェスティ応募団体に予備審査結果通知
2023年	1月	コンクール&フェスティ参加団体 必要書類の提出
	3月	開催パンフレット、ポスター完成
	22日	ボランティアスタッフ募集
	4月	開催記者発表
	3日	国内外メディアに開催広告掲載
	19日	チケット発売開始
	27日	ホール打ち合わせ
	5月	ボランティア打ち合わせ、会場下見
	12日 ～ 18日	販売プログラム納品
	19日	大阪国際室内楽コンクール&フェスタ2023開催
	21日	披露演奏会 大阪公演
	6月	コンクール テレビ番組放送
	13日深夜	フェスティ テレビ番組放送
	20日深夜	コンクール専門委員会、フェスティ専門委員会開催
	10月	事業報告書完成

課題曲選定

コンクール2023の課題曲は、中止となってしまった第10回コンクールを基に選定しました。第10回コンクール準備段階では、当時の専門委員会を中心に原案を作成し、第10回コンクール審査委員委嘱者に最終的な確認を行いました。

■ 第10回コンクール専門委員会

梅本俊和(大阪音楽大学名誉教授)、大島路子(カントゥス・クワルテット)、大友肇(カルテット・エクセルシオ)、小栗まち絵(相愛大学名誉教授)、久合田緑(京都市立芸術大学名誉教授)、渡辺和(音楽ジャーナリスト)

※役職は2019年当時

予備審査

応募団体は、予備審査のために締め切りまでに演奏動画を提出し、予備審査委員が動画によって参加団体を選出しました。

コンクール

■ 提出動画

第1部門:F. J. ハイドンの弦楽四重奏曲op. 50, 64, 71, 74, 76, 77の中から任意の1曲と、コンクール2次予選の課題曲の中から任意の1曲。

第2部門:コンクール1次予選の[1]、及び2次予選の課題曲の中から各々1曲。

■ 予備審査委員

堤剛(審査委員長、チェロ)、小栗まち絵(ヴァイオリン)、久合田緑(ヴァイオリン)、大島路子(ヴィオラ)、大友肇(チェロ)、練木繁夫(ピアノ)
※練木先生は第2部門のみ

■ 審査日

2022年11月2日(水)、3日(木)／第2部門 48団体
2022年11月4日(金)、5日(土)／第1部門 29団体



■ 審査結果

	応募団体数	予備審査通過数
フェスタ	84	12
第1部門	29	10
第2部門	48	11

参加承認連絡

予備審査の結果は、開催委員会への確認後に、コンクール応募団体には11月末に、フェスタ応募団体には12月末にEメールで通知されました。

予備審査通過団体には、参加のために必要な書類の提出を行ってもらいました。

予備審査通過団体の中には、止むを得ない理由から出場辞退となってしまう団体もあるため、その場合には予め決めていた補欠団体の意思を確認の上、繰り上がりで参加となりました。

拠点別応募／参加数

拠点国、地域	弦楽四重奏				ピアノ三重奏				ピアノ四重奏				フェスタ				合計									
	応募		参加		応募		参加		応募		参加		応募		参加		応募		参加							
	団体数	人数	団体数	人数	団体数	人数	団体数	人数	団体数	人数	団体数	人数	団体数	人数	団体数	人数	団体数	人数	団体数	人数						
1 アメリカ	6	24	2	8	6	18	1	3									8	23	1	2	20	65	4	13		
2 アルメニア																	1	3			1	3				
3 イギリス	1	4			3	9											8	31	1	4	12	44	1	4		
4 イタリア	1	4	1	4												1	4	1	4	4	15		6	23	2	8
5 エストニア																	1	6			1	6				
6 オーストラリア	1	4			1	3										2	8			4	15					
7 オーストリア	2	8			1	3										3	7	1	2	6	18	1	2			
8 オランダ	3	12			1	3	1	3	1	4					4	14	1	2	9	33	2	5				
9 カナダ																1	2			1	2					
10 カザフスタン																1	2			1	2					
11 韓国	1	4			1	3			1	4						1	3			4	14					
12 コロンビア																2	9			2	9					
13 シンガポール	1	4														1	2			2	6					
14 スイス	2	8	1	4	1	3	1	3								3	12	1	5	6	23	3	12			
15 スペイン					1	3														1	3					
16 タイ																1	5			1	5					
17 台湾																1	2			1	2					
18 中国	2	8	2	8	1	3			1	4						6	29			10	44	2	8			
19 チェコ						2	6													2	6					
20 デンマーク					1	3														1	3					
21 ドイツ	2	8	2	8	10	30	4	12	1	4	1	4	5	13	1	2	18	55	8	26						
22 フィンランド																1	2			1	2					
23 フランス	3	12			4	12	1	3	1	4						7	28	2	9	15	56	3	12			
24 ブルガリア																1	3			1	3					
25 ベルギー					1	3														1	3					
26 ポーランド																2	6			2	6					
27 ボスニアヘルツェゴビナ																1	2			1	2					
28 香港																1	2			1	2					
29 メキシコ																2	6			2	6					
30 モルドバ																1	4	1	4	1	4	1	4	1	4	
31 モンゴル																1	5	1	5	1	5	1	5	1	5	
32 ルーマニア																1	2			1	2					
33 ロシア					3	9										2	5	1	3	5	14	1	3			
34 日本	4	16	2	8	5	15	1	3								11	35	1	5	20	66	4	16			
合計	29	116	10	40	42	126	9	27	6	24	2	8	84	286	12	43	161	552	33	118						

広報宣伝活動

前回開催された第9回(2017年)からコロナ禍を経て、国際郵便の状況やオンラインツールの普及など、広報を取り巻く環境も大きく変化しました。そのため今大会では従来の紙媒体での広報に加え、オンライン上での広報も行いました。

●…紙媒体 ★…オンライン媒体 ○…テレビ番組放送

1. 参加団体募集時の広報(2022年3月～2022年10月)

[海外向け]

広告●「Chamber Music America」(2022年夏号、アメリカ)

広告★「Chamber Music America」メールマガジン
(2022年8月8日配信、アメリカ)

広告★「The Strad」ウェブサイトバナー広告(2022年6月、アメリカ)

広告★「Bachtrack」ウェブサイトバナー広告(2022年6月、イギリス)

広告★「Musicalchairs」演奏家オーディション情報サイト掲載
(2022年4月～10月10日)

★「国際音楽コンクール世界連盟」ウェブサイト掲載(2022年3月～)

★「Bachtrack」ウェブサイトコンクール情報掲載
(2022年4月～、イギリス)

●★参加団体募集チラシ・ポスターの送付
(英語版、3月より配布開始)

※コロナ禍における海外の郵便事情の悪化や、広報環境の変化により、従来より紙媒体の送付は減らし、チラシデータのEメール等による送付を増やした。(データを送ることで、メールや各種SNSでの拡散を見込んだ。)

広告★Facebook・Instagramオンライン広告(2022年5月～9月)

広告★YouTubeオンライン広告(2022年5月～9月)

[国内向け]

●参加団体募集チラシ・ポスター(日本語版、3月より配布開始)

国内の音楽大学、演奏家育成機関、音楽ホール等に送付

DM送付:大阪アーティスト協会DM会員、日本演奏家連盟会員

広告 記事●「音楽の友」(2022年6月号)

広告 記事★「Webマガジン ONTOMO」記事、バナー広告

(2022年5月9日～月23日)

広告●「ぶらあぼ」(2022年7月号)

広告★「ぶらあぼONLINE」バナー広告

(2022年5月28日～6月9日)

記事●「関西音楽新聞」(2022年5月1日)

★Facebook・Instagramオンライン広告(2022年5月～9月)

★Twitterオンライン広告(2022年5月～9月)

★YouTubeオンライン広告(2022年5月～9月)

2. コンクール&フェスタ2023開催前の広報(2023年3月～2023年5月)

2023年3月22日の開催記者発表以降、国内の雑誌・オンラインメディア等への広告出稿と合わせて、参加団体の写真が掲載された総合パンフレットと披露演奏会のチラシを配布し、広報宣伝活動を行いました。

[特設ウェブサイト]

2023年3月22日オープン <https://jcmf.or.jp/compefesta2023/>



[総合パンフレット配布](制作:デザイン・グリッド)

●住友生命いづみホールのフレンズ会員宛てにチラシを送付

●大阪アーティスト協会会員宛てにチラシを送付

ほか、コンサート等での配布、音楽大学、演奏家育成機関、音楽ホール等への送付

[メディア]

記事●★「大阪日日新聞」(2023年3月31日掲載)

記事●「ショパン」(2023年5月号)

広告 記事●「音楽の友」(2023年5月号)

★「Webマガジン ONTOMO」記事(2023年5月7日)、

広告バナー(2022年5月7日～21日)

広告●「ぶらあぼ」(2023年5月号)

記事★「ぶらあぼONLINE」(2023年3月24日、4月26日)

広告 記事●「サラサーテ」(2023年6月号掲載)

記事●「住友生命いづみホール情報誌Jupiter」

(2023年4～5月号)

記事●読売テレビ 情報番組ten.(2023年3月22日放送)

広告 配信★海外「The Violin Channel」ウェブサイト、Eメール
ニュースレター」(2023年5月、アメリカ)

3. コンクール&フェスタ2023開催後の記事等(2023年5月～)

配信★海外「The Violin Channel Eメールニュースレター」

(開催期間中定期的、アメリカ)

記事●「関西音楽新聞」(2023年6月1日、7月1日)

記事●「音楽の友」(2023年7月号)

記事●「サラサーテ」(2023年7月号)

記事●「音楽現代」(2023年7月号)

記事★「ぶらあぼONLINE」(2023年5月19日)

記事●★「日本経済新聞」(2023年5月26日)

記事●★「大阪日日新聞」(2023年6月4日)

記事●★「日本海新聞」(2023年6月4日)

記事★海外「Le Dimore Del Quartetto」(2023年5月、イタリア)

記事★海外「Archi magazine」(2023年5月19日、イタリア)

記事★海外:「Classical Voice North America」

(2023年6月1日、アメリカ)

記事●★海外:「The Strad」(2023年8月21日、イギリス)

記事★海外:「Bachtrack」(2023年5月23日、イギリス)

番組●○読売テレビ(関西ローカル)特別番組「大阪国際室内楽コンクール & フェスタ2023」(2023年6月13日、6月20日)



広報関連製作物

募集要項



コンクール参加団体募集チラシ



フェスタ参加団体募集チラシ



総合パンフレット



フェスタ審査員募集チラシ



コンクールのプログラム



組織と担当

セクション		JCMFスタッフ	協力スタッフ	(主な内容)
総務	総務	菱田義和、仁賀木三恵、森田睦美、木邨裕美、藤門浩之、牧野立太	ワントゥン、他	会場事務局設営、来賓受付、経理、庶務、保険、各種イベントの案内、配席、備品、弁当、記念品
	ウェルカムディナー	牧野立太、藤門浩之、菱田義和、仁賀木三恵、森田睦美、木邨裕美	ニューオータニ大阪通訳(寺田)	会場手配、案内、受付、進行、クローケ
	記念パーティー	牧野立太、藤門浩之、菱田義和、仁賀木三恵、森田睦美、木邨裕美	ニューオータニ大阪通訳(寺田)	案内、受付、司会
	感染症対策	藤門浩之、仁賀木三恵		水際対策、参加者・関係者の対応確認、保健所や医療機関との連絡、発生時の対応想定
	名義窓口	牧野立太、菱田義和		共催、協賛、贊助との交信
会場関係	会場表回り統括	牧野立太、仁賀木三恵	住友生命いづみホール	レセプション指示、お客様案内、来賓対応
	会場装飾	大丸敦子、菱田義和、河井拓	住友生命いづみホール 読売テレビエンターブライズ	ホール周辺装飾、舞台周り、ロビー装飾設営など
	会場受付	仁賀木三恵、森田睦美、木邨裕美	大阪アーティスト協会	チケット販売(前売、当日)、団体受付、プログラム販売
	ステージ	河井拓、大丸敦子	エスエムエス、エスエス企画 白石(譜めくり)、通訳(小野)	ステージマネジメント、進行管理、譜めくり手配
●コンクール担当 河井拓	審査委員対応	河井拓、牧野立太 仁賀木三恵(金銭授受)	花田和加子	出迎え、審査委員会議、結果発表、期間中アテンド、審査料の支払い、見送り
	委嘱作	河井拓、奥田もも子	東京コンサート	望月先生ケア、ディスカッションセッション進行、プレトーク進行
	参加者対応	西村有香、河井拓、柳圭史 東山真奈美、奥田もも子、河井美恵	JTB ボランティア	受付、説明会(通訳:寺田)、連絡、出場案内
	ボランティア	西村有香、東山真奈美、河井拓	大阪府国際交流財団	募集、日程毎にボランティアの配置、連絡、QUOカード
	フェスタ対応	柳圭史、藤門浩之 大丸敦子(審査員募集)	中尾理恵、繁益朱三子、 ワントゥン、JTB	審査員応募受付、資料送付、当日受付、結果発表、QUOカード、審査員長対応、ウェブ審査
	フェスタ司会		山上和美(三重) 市井啓子(富山) 萩原章嘉(ytv)(大阪)	司会
	他都市開催	柳圭史、藤門浩之	富山県高岡文化ホール 三重県文化会館	他都市開催対応
	表彰式	藤門浩之、菱田義和	大阪サンレオ 通訳(寺田)、ワントゥン	備品、会場設営、司会
	披露演奏会(大阪)	柳圭史、河井拓、西村有香、大丸敦子	住友生命いづみホール	出場団体連絡、プログラム作成、来賓受付 協賛社他案内、配席
	披露演奏会(東京)	河井拓、西村有香、大丸敦子	サントリーホール	演奏団体の引率、プログラム作成、招待客案内、会場受付、配席
●運営本部長 牧野立太	学校関係	柳圭史	各学校	近隣の高校に事前連絡、当日受付
	記者発表	大丸敦子、河井拓、藤門浩之	ニューオータニ大阪 通訳(寺田)	マスコミ案内、受付、資料作成、情報配信
	広報 プレス対応	大丸敦子、河井拓、柳圭史 藤門浩之、西村有香		各種印刷物作成、メディアへ案内、コンクール進捗を情報発信、出版社対応
	併催企画	藤門浩之、河井拓	松本貴之、村上高明、 山川友基(ytv) 長尾賢(今福音堂)	大阪チェンバーミュージック・ホライゾン2023
	撮影・記録	藤門浩之、柳圭史、菱田義和	(株)アッシュ、(株)コブ、他	会場内の機材設営、撮影
	オンラインストリーミング	藤門浩之、柳圭史、菱田義和	ytv、Nextry	番組製作、取材、撮影対応
	テレビ収録	藤門浩之、菱田義和	ytv、Nextry	収録、編集など
	CD製作	藤門浩之、菱田義和、大丸敦子	東京光音	記録用撮影、情報発信時に即座に写真選別
	写真撮影	大丸敦子、牧野立太		

コンクールレポート

後藤 菜穂子

演奏水準が高く、出場者同士の敬意を感じるコンクール

これまでに筆者はさまざまな国際音楽コンクール(ピアノ、ヴァイオリン、フルート、指揮、作曲など)を取材してきたが、今回、大阪国際室内楽コンクール&フェスタのファイナルにおいて印象深かったことは、出場者同士の仲間意識、互いに対する敬意であった。授賞式では、受賞グループが壇上に上がるたびに他のグループが大きな声援と拍手を送っていたが、そうした光景はどのコンクールでもみられるわけではない。きっと、このイベントにはコンクール部門と別に、ジャンル不問のフェスタ部門が併設されていることもこうしたフレンドリーな雰囲気につながっているのだろう。コンクールの審査委員も、審査の時間以外は厳格に隔離されることもなく、近づきやすい雰囲気であった。本来、室内楽というジャンルには「競い合う」という考えは合わないのかもしれないと思った。

筆者は5月17日のフェスタ部門のファイナルラウンドと、翌18日のピアノ三重奏/四重奏部門および弦楽四重奏部門の各本選を聴いた。

弦楽四重奏部門では6ヶ国から10団体が、ピアノ三重奏/四重奏部門では7ヶ国から11団体(ピアノ三重奏9組/ピアノ四重奏2組)が動画審査を経て大阪に招かれた。そこからそれぞれ3組が本選に進出、弦楽四重奏部門では、日本、アメリカ、イタリアのグループ、ピアノ三重奏/四重奏部門ではドイツ、フランスの三重奏団、ドイツの四重奏団という顔ぶれとなった。全体を通じて演奏水準はきわめて高く、全員が室内楽というクラシック音楽の中でもとりわけ奥の深いジャンルに真摯に向き合っていた。

さて、弦楽四重奏部門は本コンクールの柱であり、過去の優勝団体にはヘンシェル、ベルチャ、ドーリック、アッカといった現在世界的に活躍しているグループが名を連ねる。今回本選に残った3団体は、さまざま点で一音作りの点でも奏者の配置の点でも、グループ内での力関係の点でも一異なっていたのが興味深かった。さらに、各団体とも違う作品を選択した(本選では、ベートーヴェンの後期の四重奏曲またはシューベルト第15番から一曲選ぶ)。

最初に登場したのは東京藝術大学で学んだ4人から成るほのカルテットで、ベートーヴェンの第12番を演奏した。このグループでは第1ヴァイオリンの岸本萌乃加が全体のリーダー格であり、彼女を中心に緻密かつ繊細なニュアン

スに富んだ演奏が築き上げられていた。息の合った演奏で、様式的な統一感も良く取れていたが、一人一人がもう少し音を遠くに飛ばすことを意識したらより彼らの表現したいことが伝わったのではないかと感じた。その点においてはアメリカのテラ弦楽四重奏団は、むしろ外向きのアプローチを取り、大きな身振りで感情豊かに演奏した。ヴィオラートを多用した温かみのある艶やかなサウンドで、一人一人がソリスティックかつ華やかに弾くのが特徴だ。ベートーヴェンの第15番は長大な作品であるが、彼らは確信を持って巧みに展開し、つねに対話を交わしながら、時には思い切った大胆な表現も見せた。とりわけ、第2、第3楽章の対照性をうまく描いていたが、終楽章の途中でやや集中力が低下したのは否めない。

他方、シューベルトの生涯最後の弦楽四重奏曲第15番を選んだイタリアのグループ、クアルテット・インダコは、3組の中でもっとも完成度が高く、よく練られた演奏を聴かせた。彼らの特色は、第1ヴァイオリンのエレオノラ・マツノの美音と洗練されたフレージング、グループのエンジンとも言えるチェロ奏者コジモ・カラヴァニの力強い低音がしっかりと枠を固めつつ、その中で4人が自在に音楽を繰り広げる点



だ。音作りは透明性があって抒情的であり、その一方でこの作品の持つ光と影の劇的な対比、さらには感情的な脆さもうまく表現していた。一般にシューベルトの演奏を聴く際に、その執拗な反復性が楽しめたら、それは優れた演奏の証だと言つてよいと思うのだが、彼らはその点を充分にクリアし、第1位に選ばれた。



同日の午前中に
行われたピアノ三重奏/四重奏

部門の本選では、各グループはロマン派の主要作品に加えて、課題の日本人作品を演奏することが求められた。ピアノ三重奏の課題曲は武満徹の「ビトウイーン・タイズ」、ピアノ四重奏の課題曲は細川俊夫の「レテの水」であった。最初に登場したフランスのグループ、トリオ・パントゥムは、武満作品を繊細かつ洗練された演奏で聴かせた。一つ一つの音、身振りが水彩画の筆使いのように流麗で、霧囲気に満ち、また休符の沈黙も同様に雄弁であった。続いて、彼らはシューベルトのピアノ三重奏曲第2番を演奏した。希望と絶望の両極を揺れ動く作品を、美しく繊細に紡いでいたが、やや表現が抑制されすぎていたようにも感じられた。シューベルトの人生最後の年の作品であることから、作品の儂さ、脆さを強調したかったのかもしれないが、抒情的なセクションではもっと自由に歌い、飛翔してほしかったと感じた。

もう1組のピアノ三重奏、ドイツのトリオ・ミケランジェリは、シューベルトの第1番の方のピアノ三重奏曲を選んだ。国籍の違いだけではないだろうが、彼らのアプローチや音作りは、トリオ・パントゥムとは明確に異なってきた。トリオ・ミケランジェリの武満は、より鮮明な色遣いと力強い筆使いで描かれ、響きもより厚みがあり、より物語性を感じられた。個人的には、パントゥムの繊細なアプローチの方がしっくりきたが、どちらの解釈も十分に説得力があった。他方、トリオ・ミケランジェリのシューベルトは全体的に優美で豊かな響きを持って奏された。ソリストックな旋律とバスという二つの役割を巧みに弾き分けていたチェリスト、そしてピアニストの抒情性としなやかな歌い回しが印象に残った。

2組のトリオに挟まれて登場したのは、カピバラ・ピアノ・クアルテット。ドイツ出身となっているが、多国籍のアンサンブルで、4人のうち3人は海外育ちだが日本にルーツを持つ。ピアノ三重奏とピアノ四重奏では、グループとしての形態も力関係も、曲の造りも異なるので、同じカテゴリーで審査するの



は困難であろう

と想像するが、そういう状況を差し引いてもカピバラ・ピアノ・クアルテットによる細川作品とブラームスのピアノ四重奏曲第3番の演奏は、フレッシュで活き活きとした表現と、アンサンブルの緻密さと音程の精確さにおいて抜群に出していた。

同グループは結成されてからまだ2年に満たないそうだが、それぞれ室内楽の経験が豊富であるのみならず、ソリストとしても活躍しているような名手が揃っている。ピアニストのマリオ・ヘリングは2018年のリーズ国際ピアノ・コンクールで2位を受賞した逸材で、実は筆者はその時の演奏も聴いている。3人の弦楽器奏者たちもぴったりと息が合っており、しかも共鳴し合って豊潤な響きを生み出していた。とりわけブラームスの緩徐楽章は息を飲むほど美しくかつ安らぎに満ちており、コンクールであることをすっかり忘れててしまうほどであった。第1位にふさわしい納得の演奏であり、しかも本コンクールの30年の歴史において、ピアノ四重奏團として初めて第2部門での優勝となった。

結果的に、グループとしてもっとも長く活動しているクアルテット・インダコ(元々結成は2007年。その後メンバーの入れ替えあり)が弦楽四重奏部門で優勝を果たし、一方結成間もないカピバラ・ピアノ・クアルテットが、ピアノ三重奏/四重奏部門に優勝したのは興味深い。この大阪での経験をもとに世界で大いに羽ばたいてほしい。

常に過去のレベルを上回るコンクール



33団体、118人の演奏家、おおよそ50時間の演奏時間が5月12日から19日の8日間に詰め込まれている—これが大阪国際室内楽コンクール＆フェスタ2023である。

評判通り、世界で最も大きな規模を誇るコンクールであり、3つの独立したコンクールが同時に開催され、その一つ一つにそれぞれの審査員、賞、優勝団体にはフォローアップの日本ツアーが準備されている。第1部門として弦楽四重奏、第2部門としてピアノ三重奏と四重奏、そしてユニークな部門であるフェスタの3部門で構成されている。参加者たちは第1部門は4つのラウンド、第2部門は3ラウンド、そしてフェスタは3ラウンドの閑門を通り抜けなくてはならない。コンクールの第1位受賞団体には250万円、第2位受賞団体には120万円、第3位受賞団体には80万円が賞金として贈られる。フェスタ部門では様々な賞金をあわせると合計300万円以上となる。また、小規模な特別賞なども設定されていた。

この3年に1度のイベントは日本室内楽振興財団によって主催されており、財団は日本国内において室内楽への関心を高め、促進することと、音楽を通して国際交流に貢献することを目的としている。この点において、成功をおさめたと言えるであろう。

この3年に1度のイベントは1993年に始まり、2011年に東北で地震が起きて放射能汚染の恐怖が何百何千もの訪問者を日本から遠ざけた2011年を含めて、絶え間なく開催し続けていた。しかしコロナウイルスの蔓延は致命的な打撃となり、2020年第10回として予定されていたコンクールは3年間延期となった。したがって主催者は2023年のコンクールを10回目・11回目と明言せずに、開催年で示すこととした。そのタイトルに間わらず、今回は記憶に残るイベントであったと言える。

筆者が来場した2011、2014、2017、2023年の過去4回では、常に前回よりもレベルが高いと言われていた。そしてそれは今回も同様であった。今回参加できなかった多くの団体は前回では簡単に参加できていたかもしれない。数少ない枠に入ったアンサンブルにとって、コンクールは素晴らしいものになった。

コンクール審査委員長で名高いチェロ奏者である堤剛氏は今年81歳を迎え、18ヶ国77のコンクール応募団体のうちもつと多くの団体を受け入れられなかつたことを残念がっている。日本を代表する音楽評論家の一人である渡辺和氏は室内楽ファンであり大阪のコンクールは第1回開催より毎回来場していて、今回の大阪でのコンクールの第2部門は、他のどこよりも、また、コンクール始まって以来のレベルの高さだったと断言している。私個人としてはそれぞれのラウンドで演奏団体を排除するという審査委員の仕事をうらやましいとは思っていない。ほとんど全ての演奏が賞に値するのだ。

堤氏が統括する弦楽四重奏の審査委員は、現在もしくは過去に著名な弦楽四重奏団のメンバーであった演奏者で構成されている。そのうちの2名は初期のコンクールに第1位を受賞した、ヘンシェル・クアルテットのヴァイオラ奏者のモニカ・ヘンシェル氏や、ベルチャ・クアルテットのチェロ奏者のアラスデア・ティト氏である。堤氏はピアノ三重奏と四重奏の審査委員の統括も務め、委員のメンバーは弦楽四重奏の審査委員と3人のピアニストで構成されており、そのうちの一人であるエッカルト・ハイガーズ氏は1993年に行われた第1回コンクールで第1位を獲得したトリオ・ジャン・ポールのメンバーであった。

コンクール2023は5月12日弦楽四重奏の1次予選とともに本格的に開始した。イタリアのインダコを除く全ての団体に少なくとも一人のアジア系が含まれていて、ドイツに拠点を置くアスト・クアルテットを含む5団体がアジア系だけのクアルテットである。メンバー全員が女性なのは3団体で、男性だけのクアルテットはなかった。それぞれがベートーヴェンのop. 18と、ウェーベルンのop. 5(クラルターゲの弦楽四重奏曲が課題曲に入っていたが選択した団体はいなかった)を演奏。どのクアルテットも、ウェーベルンの曲を様々なアプローチで演奏することに成功していた。ラサ弦楽四重奏団はロマンティックな要素を強調していく、ほのカルテットは楽曲を



深く掘り下げ激し

い情熱を前面に出し、マリオン・

クアルテットはゆっくりで静かな楽章に暗い神秘を見つけていた。この魅力的な音楽を聴くのに10回では足りないくらいだ。ベートーヴェンの曲は、3団体が第1番へ長調を選択し、5団体が第4番ハ短調を選択した。第4番の方はどのクアルテットも音楽のドラマ的侧面を強調しすぎて、力強さよりも勢いを表現しているように感じられるもの多かった。個人的に一番良かったベートーヴェンは、スイスのモーザー弦楽四重奏団、中国のヴィヴァーチェ・クアルテットであった。モーザー弦楽四重奏団はメンバー全員が女性で、美しいドレスを纏い(今回第1部門と第2部門の、他のはほとんど全ての参加者が黒の衣装を着ていたことは特筆すべきところであろう)、チェリスト以外は立って演奏しており、第1番へ長調を徹底的に磨き上げ、特に統一感のある、均質な音と解釈的アプローチが抜群に出ていた。ヴィヴァーチェ・クアルテットは、独自の明るく、鋭い音にも関わらず、エネルギーとリズムの正確性で聴衆を魅了することのできる、高い統一感を持ったアンサンブルであることが証明された。モーザーとヴィヴァーチェ共に2次予選に進んだ8団体に含まれていたが、どちらも3次予選に進むことはできなかった。

翌日はピアノ三重奏／四重奏の1次予選が行われた。11の団体が朝10時から夜の8時まで演奏し続けるワグナーのオペラ全曲を2曲続けて聴くに等しいマラソンのようなイベントと言える。11団体中9団体がピアノ三重奏であったが、ピアノ三重奏はピアノ四重奏よりはるかに数が多いので驚くことではない。

課題曲はモーツアルト、ハイドン、ベートーヴェン(op. 16)やリーム(「見知らぬ土地の情景」I 又は III)、カーター(エピグラム)、細川(「トリオ」(2013))、シュニトケ(ピアノ四重奏曲)で構成されていた。例外なく、現代曲は素晴らしいものからセンセーショナルなもの、中には衝撃的と言える演奏もあった。クラシックの課題曲は弦楽四重奏よりもレベルが高

く、2次予選に進むに値しないと思った団体は1団体もなかったと言える。特に目立っていたのはアルベニス・トリオとトリオ・ミケランジェリであった。しかしどういうわけか、前者は次のラウンドに進めなかつた4団体に含まれており、これは大きな期待外れであった。トリオ・ミケランジェリのリカルド・ガリアルディ、カピバラ・ピアノ・クアルテットのマリオ・ヘリング、アルベニス・トリオのハビエル・ラメイクスやトリオE.T.A.のティル・ホフマンなど、もし当人が望めばソロでのキャリアを追求することができるピアニストもいる。

なお、E.T.A.とはEstimated Time of Arrivalではなく、ドイツの著名な作家の名前からきている。

弦楽四重奏の2次予選はまたマラソンデーであった。8団体が3次予選の5つの枠をかけて演奏する。それぞれの団体が約1時間ずつ演奏し、熱心な音楽愛好家にとってもこれは耐久力テストを受けているようなものだ。しかしこ日の全体的な印象は非常に高いレベルの演奏であった。8団体全てが容易に次のラウンドに進む資格を得ることができるほどであった。再度になるが、モーザー弦楽四重奏団は際立っていたし、また、ほのカルテット、マリオン・クアルテットも同様であった。3団体とも絶対的な技術、バランスの取れた音、解釈の一貫性を抱くものである。他のクアルテットも良い演奏を披露したが、オーケストラのような音を出そうとしているのではないかという凝りすぎたアプローチで演奏しがちであった。

20人の作曲家・37曲の課題曲がある中、不思議なことにシューベルト、シューマン、ドヴォルザークやショスタコーヴィチの作品を演奏した団体はいなかった。4団体がブラームス(全て第2番)、現代曲ではリゲティの第1番が3回、バルトークの第4番は1回だけであった。

2日後に行われた3次予選では、5団体が本戦への3枠を勝ち取るために演奏し、審査委員はほのカルテット、クアルテット・インダコ、テラ弦楽四重奏団を選んだ。これで、第1位、第2位、第3位が決まることとなり、後は審査委員がどう順位を決めるかということだけが残されていた。3次予選の課題曲はベートーヴェンの中期の四重奏曲と望月京の委嘱作品「Boids again」である。3次予選では、インダコとほのが第1位の印象を与えた。インダコは美しい音の輝き、完璧な演奏、完璧なバランス、全体的な演奏の気品が微かな音でも無理なく表現し、大きな音でも醜さを感じさせない演奏であった。

ほのカルテットは激しさと柔らかさのコントラスト、高い表現力のアプローチと技術面において絶対的な完成度で群を抜いていた。

2日後に行われた本選でインダコが1位、ほのが2位なったことは驚きではない。本選ではベートーヴェンの後期作品が並ぶ中、インダコが選択したシューベルト最後の作品の演奏が他のベートーヴェンの作品に優って1位になったのは初めての事である。

「Boids again」について少し触れたい。これは2020年に予定されていたコンクールのために作曲されたものであったが、コンクールが中止となったためクアルテット・エクセルシオが昨年大阪で世界初演することとなった。このタイトルは鳥の群れがお互い近くても、多方向であってもぶつかることなく飛ぶことができる現象を参考にしているものである。望月氏のアプローチはこの動きを弦楽四重奏に取り入れ、巧妙にデザインされた曲が聴いて楽しいが、一方でコンピューターで作られた音はもっと効果的であるのかと疑問を残すものとなった。クアルテットのメンバーはお互いそれほど交流せず、それぞれの道を進み、質感のある多層的構造が、興味深い効果を与えている。楽譜には4/4拍子が表示されているが、音楽には拍がなかった。我々が聴いたのは鳥小屋からピーピー、ピヨピヨ、湿地帯の鳥の鳴き声、大型猛禽類のクワッ、ウフーッという擬音である。6~7分で、それは退屈しないちょうど良い長さである。私の耳にはこの5団体の演奏に判断を下せるほど大きな違いがあったようには聴こえなかった。作曲者の望月氏自身が、印刷された楽譜に厳密に従いすぎることを期待していないと公言している。

ピアノ三重奏と四重奏の2次予選は実に爽快な体験だった。7団体(6つの三重奏と1つの四重奏)が素晴らしい演奏を次から次へと披露し、どのアンサンブルも1位ではなくとも少なくとも2位に値する演奏だった。たくさんのレパートリーの中から、(各アンサンブルが2曲ずつ演奏)2団体がラヴェル、2団体がメンデルスゾーンの第2番、2団体がショスタコーヴィチの第2番、そして2団体がブラームスの第1番を選択。しかし最も人気があったのは本当の愛好家以外にはあまり知られていない、ワインベルクの三重奏曲であり、3団体がそれを演奏した。マルティナーの三重奏曲第2番も演奏された。

審査委員はいつもより時間をかけて本選に進む3団体を選考した。トリオ・パントゥムは、魅惑的にラヴェルを演奏し、(アンサンブル名はラヴェルの第2楽章のタイトルに由来する)、楽譜に微妙な色合いとダイナミックな陰影の世界をもたらし、そして時折キラキラ輝いていた。しかし、私の耳には7団体の中で本当に際立っていたのは最も均質で完璧に調和された音を披露していたように聴こえたカピバラ・ピアノ・クアルテットであった。フォーレの四重奏曲第2番は、この

日で一番繊細で、洗練されており、音の美しさが表現されていた。うるさすぎず繊細で、必要なところには力強さもある。カピバラが大阪のコンクールでピアノ四重奏として初めて第1位を獲得し、トリオ・パントゥムが第2位を受賞したことは驚きではないであろう。

カピバラ・ピアノ・クアルテットのメンバーは、現在で7つの国際コンクールで入賞し、メンバーは6か国語を話し、カピバラの体長は5フィート近くに大きくなり、メンバーは4つの都市(ハノーファー、フランクフルト、パリ、アムステルダム)、3つの国にそれぞれ住んでおり、グループとして活動してからやっと2年が過ぎ、1つの音として聴こえるようになっている。では、カピバラとは何であるのだろうか? 南米に多く生息する齧歯(げつし)動物であるが、日本人はこの動物に対して特別な愛着があり、日本のある地域にも生息し、人気のアニメのキャラクター(カピバラさん)にもなっている。メンバーのうち2人と半分が日本人(1人はダブル)であることも偶然ではないであろう。

コンクールの6日目はフェスタの日である。これこそが大阪のイベントを特別なものにしているものである。今年は30か国から84団体の応募があった。それらの応募の中から、フランスのアコーディオン四重奏、オーストリアのマリンバデュオ、イスの金管五重奏団、モンゴル、モルドバ、アメリカの民族アンサンブルなど魅力的なアンサンブルが選ばれた。

フェスタは一般的に世界でもユニークなイベントであると考えられている。ユーディ・メニューイン氏によって提案されたもので、2人~6人までの音楽家で、年齢は問わず、どんな種類のクラシックや民族音楽も日本に住む熱心な音楽愛好家の審査員の前で演奏することができるというものである。毎回このコンクールが開催されるたびに、事務局は最も公平で効果的な方法のために形式を少し変えて運営している。過去には3ラウンド全てが大阪で行われて、同じ観客・審査員が全てのラウンドに立ち会わなくてはならなかった。

弦楽四重奏や他の部門と同じ基準で参加団体たちがふるいにかけられていく。かつては投票のたびに最も直前に聴いた演奏に投票する傾向があるという問題があった。審査員はまた、丸3日間という仕事中毒の日本ではあまり与えられない贅沢な時間を確保する必要があった。2017年のフェスタでは、ランダムに割り当てられた2団体ごとに競い合い、勝者が次のラウンドに進むというテニスの選手権のような方式に変更された。2023年には更に進化し、1次ラウンドは大阪ではなく三重県と富山県という離れた2ヶ所で行われ、それぞれの場所で審査員が用意され、参加団体はどちらかの場所にランダムに分けられるという方式がとられた。三重

県と富山県でそれぞれ勝ち上がった3団体ずつ、合計6団体が大阪でのラウンドに進み、新たな審査員によって投票された。今回の取り組みによって、大都市大阪以外の他の地域にも室内楽の面白さを広めることができたと考えられる。

メニューイン金賞とフォークロア特別賞はモンゴルのアンサンブル、テンゲル・アヤルグー(天空のメロディーという意味)が受賞した。この5人の演奏家は8種類のモンゴルの楽器を演奏し、赤と黒の衣装で審査員に強い印象を残し、他の2団体のファイナリストよりも多い107票を獲得したのである。私はと言えば、銀賞を受賞したフランスのアンサンブル、クインテット・ル・バトー・イーグル(ランボーの詩のタイトルThe Drunken Boat Quintet[酔いどれ船]に由来する)に投票するであろう。そのメンバーから聞いたことは、この編成のための楽曲が約100曲あり、そのほとんどが1922年に結成されたパリ五重奏団に由来するフランスの作曲家によるものであるということだ。バトー・イーグルの主役であるフルート奏者、サミュエル・カザーレの奏でる音はとても豪華なものである。彼の演奏はセンスの良さと堂々とした態度、そして技術的に素晴らしい能力があわせて、世界中のどんなオーケストラでも彼を首席フルート奏者として迎えたいと思わせる演奏家なのだ。バトー・イーグルの61票という残念な票数は、もしかしたら彼らのレパートリーがジョンソン、ジョリヴェやクラといったあまり大衆受けを狙っていないレパー



トリー選び、審査員に十分な数の愛好家がいなかったからかもしれない。とは言え、コンクール＆フェスタを主催している日本室内楽振興財団の、この手の音楽への関心を日本中に広めるというミッションはかなり成功していると言える、なぜならフェスタの一般審査員の参加人数は前回2017年開催時より2倍以上に増えているからだ。

銅賞はロシアの民族楽器、バヤンとダルシマーを演奏した、アメリカのデュオ、スタス&タチアナが受賞した。

他の数々の賞に加えて、フェスタは60人の自宅でストリーミ

ング演奏を聴いた審査員によって決定されるオンライン聴衆賞が設定された。これは、コロナウイルスのパンデミックの中、音楽を聴くことで制限に耐えた日本の音楽愛好家に敬意を表して作られたようなものである。ここでははっきりとした勝者は出なかったが、3団体(テンゲル・アヤルグー、東京リード・クインテット、クワチュオール・エオリーナ)が12票ずつ獲得した。

特別賞のカテゴリーでは、日本のタレイア・クアルテットがボルドー弦楽四重奏フェスティバル賞を受賞。ほのカルテット、マリオン・クアルテットとモーザー弦楽四重奏団が大阪国際室内楽コンクール2023アンバサダー賞を受賞。クアルテット・インダコがストリング・クアルテット・ビエンナーレ・アムステルダム賞も受賞した。これらの特別賞は受賞団体がヨーロッパの主要な音楽の場で更なる経験を積むために機会を提供するものである。第1位を受賞した2団体はまた、MK記念会特別賞として50万円をそれぞれ受賞している。

大阪のコンクールは他の同様の国際イベントの中で明確な目的が際立っている。審査委員のメンバーであるモニカ・ヘンシェル氏は、「大阪のコンクールは国際的なコンクールの一つである。しかし、まだ賞を勝ち取ることを超えて、若い音楽家が社会と交流し、ネットワークを築き、芸術的価値を超えた目標を探す力を与えてくれるのです。」と語る。友情と助け合いの精神がコンクール全体に広がってきてているようだ。次のラウンドに進めるか進めないかに関係なく、競い合うアンサンブル同士がお互いを励まし合っている。ヘンシェル氏は、同じ精神が審査委員同士の間にも見られ、「私が今まで一緒に審査した中で最も協力的な審査委員で、全員が参加者と一緒にステージに立っていることを想像していた。」と述べていた。他の審査委員であった、チェロ奏者のアラスデア・テイト氏は、「音楽家たちがとても献身的で、正直で純粋で、音楽の構造をよく理解しており、音楽について何を語りたいか勇気をもって定義していた。多くのレパートリーを必要とし、大きなプレッシャーがかかる厳しいコンクールであった。しかし、最終的には全てのクアルテットが自分たちの何か新しいことを見つけられたのではないかと思う。」と述べた。

コンクールが開催された約800席を有するいすみホールは世界でも音響的に完璧なホールの一つと言える。ホール自体が賞を受賞しても良いくらいだ。シャンデリアやホールの両サイドの窓のパネルはワインの有名な楽友協会を小型化したモデルになっている。もし、室内楽がお好きなら、2025年の大阪万博を飛ばして、2026年5月に予定されている次回のコンクール＆フェスタを待ってみてはいかがだろうか？

審査委員鼎談

コンクール本選から一夜明けた5月19日、3名のコンクール審査委員の姿がホールにあった。いずれも第1回～第3回のコンクールで優勝した経験を持ち、国際的な活躍を続け、今度は審査委員として大阪に戻ってきた音楽家達。当時を振り返りながら、コンクール2023での審査の視点、そしてコンクールの意義などを自由に語ってもらった。

鼎談



エッカルト・ハイリガーズ
(トリオ・ジャン・ポール)
第1回コンクール優勝



モニカ・ヘンシェル
(ヘンシェル・クアルテット)
第2回コンクール優勝



アラスデア・テイト
(元ベルチャ・クアルテット)
第3回コンクール優勝

- インタビュー、執筆:渡辺 和 (音楽ジャーナリスト)
- 通訳:花田 和加子

大阪で優勝して

—長い7日間お疲れ様でした。皆様は過去に大阪で優勝され、それぞれのあり方で音楽家として成長なさってきたわけですね。大阪でのコンクールは皆さんにとってどんな意味がありましたか。

ヘンシェル: 27年前、随分昔のことですね。ヘンシェル・クアルテットは結成30年を迎えようとしています。大阪は私たちにとって最後のコンクールでした。いくつかの賞をいただき、キャリアの出発点となりました。素晴らしいエージェントとともに巡り会い、とてもたくさんのコンサートをすることができました。年間に180回もの演奏をしていた年もありました。頭がおかしくなりそうでしたけど(笑)、とても良い経験になりましたね。

ハイリガーズ: 私たちトリオ・ジャン・ポールは結成32年目で、30年前に大阪に参加しました。私たちにとって最初のコンクールで、ピアノ三重奏を続ける自信を与えてくれました。続けて別のコンクールに挑戦したことも含め、キャリアにとって大きな助けになりました。エージェントは大阪でのコンクール審査委員の決断と、優勝団体というアピールを信用してくれたのです。

テイト: ベルチャ・クアルテットの参加は24年前です。私にとっては弦楽四重奏活動がまだ始まったばかりでした。コンクールもロンドンとバンフでは優勝には至らず、それから1年半くらい活動できませんでしたが、大阪は私たちにとって

最初に優勝したコンクールです。これほど大きな作品を弾いたのは初めてで、とてもチャレンジングでしたが、それにやって多くのことを習得することができました。大阪での2週間は非常に緊張した時間でしたね。結果は、大阪のツアーだけではなく、大きな機会にも恵まれました。

大阪コンクールのレパートリーについて

— テイトさんがレパートリーのことを仰いましたが、初期の大阪国際室内楽コンクールは弦楽四重奏部門の課題曲にベートーヴェンの曲が多く、ファイナルには両ジャンルとも大きな作品が課されている。傍目にも極めて要求が高いものに思えました。

ヘンシェル: 仰る通りです。

テイト: そうでしたね。



ハイリガーズ: シューベルトの変ホ長調は、私たちがトリオを始めて一番最初に手掛けた作品でした。私とすれば、早い時期で難しい作品に取り組むリスクは必要だと思います。時間をかけ何度も練習することは、とても助けになります。年を重ねたからといって、これらの作品に突然飛びこんで全てを理解するなど不可能ですから。

ティト: そう、常に「最初」はあります。いずれ手掛けねばならないのですから、若いグループに早過ぎるということはありません。早ければ早いほど、作品との関係を育てることができます。

ヘンシェル: 本当にそうですね。今でも強く記憶にあるのは、大阪で弾いたベートーヴェンの作品127に一番最初に関わったときの感情です。私たちはこの作品と共に成長してきており、理解も深まっただろうとは思いますが、それでも決して結論に到達出来るものではありません。人生をかけての学びで、最終的な理解に至ることはないでしょう。ですから、できるだけ早く始めた方が良いと思います。

— 20世紀には、このコンクールは課題曲がベートーヴェンに偏りすぎていてバランスが崩れている、と関係者から批判されたこともあります。

ティト: でも、意味はあったと思いますよ。

ヘンシェル: そうですね。

ハイリガーズ: 今でもベートーヴェンは取り組まなければならぬ対象ですから。音楽学校でも、ピアニストのレパートリーにはベートーヴェンのソナタの楽章が存在しています。いろいろなことが判りますし、生徒とすれば音楽言語を知るために挑戦です。

ティト: ベートーヴェンの弦楽四重奏に関しては、初期、中期、後期と作りが明快に違っています。同じ作曲家ですがまるで違う作曲家のよう。それぞれの言語を理解することも、技術的な要求も、まるで異なります。コンクールのレパートリーに選ぶには良いやり方ではあるでしょうが、団体に拠っては時代ごとに見せ方の得手不得手もあるでしょう。それそれが自分たちのベストを示さねばならない。

ヘンシェル: ベートーヴェンの楽譜を演奏するのは、自分たちが扱っている弦楽器を越えた作業であるという事実を真剣に考えさせられました。交響曲が3、4人に縮小されたものに思え、オーケストラのように対応せねばならないのだと思ふ。その意味で、モーツアルトの弦楽四重奏を必ずしも含める必要がないという考えに、私は賛同します。



役割のオーケストレーションを意識しなくてはなりません。

ティト: 大事なのはその背景にあるものだと思います。その作曲家が創作する中でのより大きな位置付けを理解し、解釈していくねばなりません。シューベルトのピアノ三重奏や弦楽四重奏も、歌曲を理解することなしに理解はできません。

— 大阪のコンクールは弦楽四重奏部門のレパートリーにモーツアルトの曲がありませんが、どう思われますか？

ハイリガーズ: ピアノ三重奏では、モーツアルトの曲には楽器の点で言及すべきことがあります。モーツアルトはフルテピアノを考えて作曲していましたから、正確なバランスのとり方が今のピアノとは全く異なっています。現代の楽器よりも、モーツアルトの時代の楽器の方がバランスをとる点においては遙かに簡単。ですから、モーツアルトのピアノ三重奏というフォーメーションは特別なのです。

曲の様式の話をすると、ベートーヴェンは演奏家同士が奮闘し、作品と直面し、音楽の中に入っていくねばなりません。ですが、単にモーツアルトではそういうやり方は通用しない。

ティト: 私はモーツアルトの弦楽四重奏は重要だと思います。弦楽四重奏のレパートリーとしてとても重要です。コンクールによっては、モーツアルトに特化したラウンドがあるところもありますし。とはいえ弦楽四重奏のレパートリーは大切なものが多過ぎ、どれを選べば良いか判らなくなりますから、ある時点でどれを弾くかを選んでもらいたいですね。

ヘンシェル: モーツアルトは特別なところがありますね。私たちはモーツアルトを沢山弾き、ツアーもし、それなりに心地よくも感じています。ですが、どんなに経験を積んでも、ときにモーツアルトが自分たちの手中にあると思ってもするりと抜け落ちてしまうことがあるのです。コンクールという意味で考えると、とても厳しいかもしれません。ベートーヴェンやハイドンはその団体がどれほどのポテンシャルを持っているか示してくれますけど、モーツアルトはそうではないんですね。その意味で、モーツアルトの弦楽四重奏を必ずしも含める必要がないという考えに、私は賛同します。

ティト: ヤング・クラシック・アーティスト・トラストのオーディションで、参加者はオーディションに向けて沢山のレパートリーをこなさねばなりませんし、私たちもどういう音楽家なのかできるだけ完全な姿を把握したい。そんなとき、モーツアルトをレパートリーに入れます。ラヴェルやショスタコヴィチもあるなかでも、モーツアルトの緩徐楽章を30秒聴けば、その団体の感覚とか、敢えて言えば弱点までも見えてきます。それだけではなく、その音楽家の何が本当にスペシャルなのかも見えます。私は今、リンゼイ弦楽四重奏団の第1ヴァイオリン奏者だったピーター・クロッパーさんのことを思い出していました。珈琲を飲みながらいろいろ話をしたのですが、クロッパーさんは、「ハイドンとベートーヴェンは大地からもたらされ、モーツアルトとシューベルトは天上からもたらされる」と仰っていました。

皆: ああ、なるほど。

ティト: 作曲する側がそうだというだけではなく、弦楽器奏者としてもです。ハイドンとベートーヴェンは、常に弦と響きで練習をしていないといけない。シューベルトとモーツアルトは、楽器を響かせるのはさほど難しくはないのだけれど、インスピレーションとリアルな音とのバランスがとても難しい。

参加経験がある審査委員として

— 参加者と審査委員では全く違う立場ながら、大阪のステージを経験されていることは審査に影響があるものなのでしょうか。

ティト: 大昔の話ですからねえ(笑)。舞台裏を抜けてステージに出たときにドキドキして「なんてこった、これから《抒情組曲》を弾くんだぞ」って感じていたことは、とても鮮明な記憶として蘇り、参加者が感じているプレッシャーや緊張感に共感はできます。でも、大阪で審査委員として座り、自分のコンクールのときのことを思い出したら、こんなに小さな会場だったかな、と感じました。オルガンがあったことも

覚えていませんでした。真っ直ぐステージに出て行く方向しか見ていない、後ろを見上げてオルガンを目にすることができなかったんです。

ハイリガーズ: 私の記憶でも、いずみホールはとても大きかったです。私もそれほど大きくなかったので驚きました(笑)。ですが、それ以降の様々なホールでの経験もあるので、審査に影響を与えることはありません。興味深いのは、それぞれのグループがこのステージの上でどう振る舞い、どういう経験を積んでいくかです。ステージの上で聴こえるものは、客席のそれとは明らかに違います。私たちは随分とグループで話し合いました。

ヘンシェル: ホールによっては、音が散ってしまう、低音が聞こえなかったり、中声が出てこなったりしますけど、いずみホールは演奏家としての私たちが求める全てを提供してくれ、単純に楽しめます。私たち審査委員が一次予選で配慮しなければならないのは、参加者は本番前の15分間の音響チェックだけでホールのサウンドに慣れなくてはならないのだ、ということですね。

ティト: 私にとって興味深く重要なのは、どのグループがグループとしての自信を持ち、ホールに柔軟に展開できるかです。自分たちのあり方をとても強く持っていても、それをホールや聴衆と関連付けられず、既に用意してきた解釈を適合させようとしているグループもありましたね。ここはとても美しいホールですが、いきなりロールスロイスを与えられても運転に戸惑ってしまうものでしょ(皆笑)。いろいろ異なる場で演奏する経験を積む前の団体には、こういったホールでのコンクールはとても貴重な学習経験になります。評価という視点からすれば、どんな状況であれグループの可能性をはっきりと見ることが大事です。失敗はそれほど重要ではありません。そのグループの中で何が起きているか、それにどう対応しているか、失敗もより多くを知り得るための素材なのです。どのグループがお互いのことを考え察しているか、ちゃんと成長し本当に言いたいことが言っているか。



— 独奏と室内楽のコンクールの審査には違いがあるものなのでしょうか。

ティト:審査委員として下す決断は、ソロであれグループであれ、最終的には違いません。どの演奏が私に何かを語りかけ、明快な旅へと誘ってくれているか、です。グループでは、弦楽四重奏でもピアノ三重奏でも四重奏でも、それぞ



れのメンバーが違った個性を持っていますから、私だって、このチェリストが好きで、もっと聴きたいと思うことはあります。でも、その一つ一つが全体を作り上げ、全体としてコミュニケートしている。

ヘンシェル:「独奏者が集まって、ひとつの方向に向けてアンサンブルのボディを育てていく」としばしば言いますね。ひとつのアンサンブルの基本を育てるという意味では、大阪に来ているほどのグループは、自分たちが示さねばならぬ、より大きなボディを作ろうとしています。そしてそれこそが、私が室内楽に情熱を捧げる理由なのです。アンサンブルの個性の中に自分を収めていくのですから、音楽の個性に関しては、ソロの判断とグループの個性の判断は全く同じです。

ハイリガーズ:ひとつ違いがあるとすれば、ソリストはひとりでステージを完結させねばならないということでしょう。オーラを出し、聴衆があなたを信じるようにならなければなりません。アンサンブルでは、お互いがそれを助け合います。ときには個々の演奏者の弱点をカバーすることになります。とはいえ、室内楽作品の中での独奏パッセージがある場合は、個々人とすれば独奏でもアンサンブルでもチャレンジとしては同じです。

コロナ禍がコンクールに与えたもの

— コロナ禍のブランクは若いアンサンブルに影響があったのでしょうか。

ヘンシェル:非常に大きな影響を与えています。
ティト:グループによっては一年以上も会えないこともあります

した。ある若いグループに、「体を切断されたようで、本当にやる必要があることがあるのに出来ず、ゴーストペインを感じた」と言われましたね。知り合い始めたばかりの若い人々は、本当に良いエネルギーとダイナミックさを創り出していかねばならないときなのに、始まったところで切断されました。4人の個々人がいるわけですから、生きることとのバランスをどう取るか。あらゆる人がコロナに違った対応を

する中で、私が見ている沢山の若いグループがメンバー交代をせざるを得なかった。大阪まで来られたグループは、それぞれのやり方を探せたのでしょう。

ハイリガーズ:コロナが終わってひとつ良いことは、音楽学校に学生がどんどん入ってくるようになり、音楽の世界に来るようになっていることです。音楽という分野での人間の表現への需要があると感じます。あらゆるコンクールが延期されましたが、今年になって一斉に再開されています。次の世代には、今、私たちが前にしているより多くの数の音楽家が出てくるのではないかでしょうか。

ティト:日本の盆栽を思い出します。ある部分をカットし、他の部分により内側での大きなエネルギーをまわしますね。勿論、私としてもコロナの前と同じようになるとは思えませんし、そうあるべきではないと思います。多くのものがやり直しとならざるを得ません。これからは演奏旅行も以前と同じにはいかないでしょう。ベルリンからロンドンに移動するのに飛行機ではなく、余分な日数がかかる鉄道を利用します。音楽産業も変わっていくでしょう。そういうものであれ、変化の必要があります。前向きに考えれば、リニューアルなのです。どうなっていくかは判りませんが、それを期待したいと思います。

ヘンシェル:私としては、いい発展の方向だと思っています。コロナの前の自分たちを思い返すと、頭がおかしくなるような演奏旅行の日々でした。遠くに飛んでいて、コンサートをやって、そこの人々とどう関わるかも判らないままに過ぎていった。環境に優しいもの、それをもっと感じるようになるべきでしょう。前向きに考えれば、私たちの生き方の枠組みからずっと無くなっていたものを取り戻す、ということですね。

コンクール30年の変貌と未来

— 大きく変化する世界の中で、大阪コンクールは変化している印象がありますか。

ヘンシェル:ひとつハッキリしているのは、私たちが参加したときのこのコンクールはまだ新しかったということです。です

が今は、世界に無数にある国際コンクールの中でも、一握りの最も重要なもののひとつになっています。

ティト:そう、グランドスラムですね。

ヘンシェル:そう、あちこちにそれは感じます。コンクールは長い時間をかけ準備され、最初の予備審査での参加応募グループもとても沢山でしたよね。

— 弦楽四重奏29団体、ピアノ三重奏42団体、ピアノ四重奏が6団体でした。

ヘンシェル:それだけの世界中の若い世代が、大阪に来ようとしているのです。たいへんな成長ぶりです。故郷に持つて帰れる結果も、そこに費やされるエネルギーも、賞金で換えられるものではありません。私が話をしたある団体は、勝つ可能性はなかったかもしれないけど、感情に溢れ、語ることが沢山ありました。そんなエネルギーが彼らを前へと進め、大阪で経験した物語は聴衆にもはっきりと伝わるものになっていくでしょう。

— コンクールの価値が変わってきていている、という意見もあります。審査委員という立場から、コンクールに期待するものは何でしょうか。

ティト:若い音楽家たちは「コンクールに勝てば夢が実現し、キャリアが始められるのでは」と待っています。そうそう起こるものではありませんが、絶対に起こらないとは言えません。ですから、私はどのグループにも「コンクールは学習経験を積むために最も重要なのだ」と申しております。たまたま良い結果に至っても、手にするのは有効に用いるのが極めて難しい小さな可能性の扉です。数ヶ月はメディア露出があるかも知れませんが、人々は忘れてしまいます。それに、弦楽四重奏にしてもピアノ三重奏にても、エージェントはなかなか関心を抱いてくれません。そこからなんとかするのは自分たち。グループは自分たちのエネルギーを維持し、自分たちの道を探さねばならない。同じ関心を持つ若者相互の関係を築くという点では、コンクールはかけがえのない場になります。

ヘンシェル:仰る通りですね。

ティト:友人を作り、別のフェスティバルへ招待すると、こういうところでマスタークラスをやっているとか、皆が同じ言葉を通して喋っている場所ですから、正に弦楽四重奏や室内楽のグループ・セラピー(集団座談会)(笑)、それこそがコンクールの最も大切なきっかけだと思っています。

ヘンシェル:室内楽グループは、自分で自分らのプロデューサーにならねばなりません。そのためにも、「アンバサダー賞」を3つの団体に出せたことを嬉しく思っています。これこ

そ正に若い団体が欲しいものだと思うのです。グループ同士を結び付け、若いプロとしての関係を発展させる。それが将来へのチャンスになり、お互いに繋がり、交流もできる。

— そんな時代の中で、大阪コンクールはどうすればいいでしょうか。

ヘンシェル:今やっているように続けてください。皆さんはいろいろなことをハッキリ把握なさっていると思いますし、私も賞の持続可能な価値をアドバイスできるでしょうし、全てのことを芸術的な価値に結び付けていきます。「アンバサダー賞」は、多くのコンクールの中でも先進的でしょう。大阪はもう先を見据えていると思います。

ティト:ここでは、様々な賞からどのような益を得られるか、皆が大局的な視点で各グループのニーズを考えいました。どのグループなら与えられる賞を有効に使えるかも考えました。私たち審査委員は単に審査するだけでなく教育者でもあり、その原動力は、どうやって手助けしサポート出来るか、です。こういうチャレンジは大阪コンクールの最も大事な要素ですから、続けていいって欲しいですね。

ハイリガーズ:私にとって最も重要だったのは、このコンクールに参加したグループそれぞれがお互いにコンタクトし、お互いに助け合っていたことでした。最後の方では、別のグループの譜めくりまでやってましたよね(笑)。参加者が本当に親交を深め、お互いに助け合い、お互いに苦労している。コンクールを争っている状況では、普通にはない雰囲気でした。

ヘンシェル:審査委員もそんな感じでしたよ。座ってみんなで喋っていても、若い頃のような精神なんです。新しいアイデアで何が出来るか、そして新しいコネクションを探している、素晴らしい審査委員団でした。

ティト:10日ほどの間に創り出された空気は、まるでフェスティバルのようでした。多くのグループが別のグループを聴きにやってきてているのは、とても重要なと思いました。

ヘンシェル:実際にそのグループでコネクションが出来るとか、何かが起きると素晴らしいですね。



スタッフリスト S T A F F L I S T

開催委員会
住友生命いづみホール

ステージ
通訳

コンクール審査委員担当
譜めくり

YouTube配信
オンライン審査

番組制作
スチール
ホライゾン企画

来場者受付
移動手配

宿泊・会場手配
運営スタッフ

〈フェスタ〉

富山1次ラウンド
三重1次ラウンド

セミファイナル＆ファイナルMC
表彰式MC

日本室内楽振興財団

事務局

牧野立太、藤門浩之、菱田義和、仁賀木三恵、
森田睦美、木邨裕美、大丸敦子、西村有香

フェスタプロデューサー

柳圭史

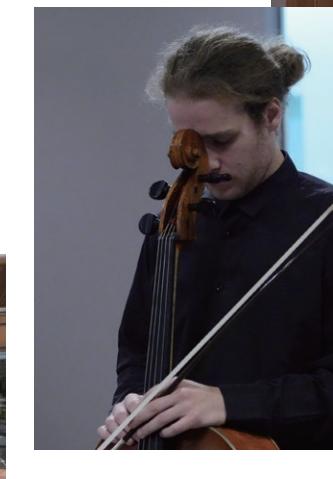
総合プロデューサー

河井拓



大阪国際室内楽コンクール&フェスタ2023

Osaka International Chamber Music Competition & Festa 2023



大阪国際室内楽コンクール&フェスタ2023 事業報告書

発行日 2023年10月23日

編集・発行 公益財団法人日本室内楽振興財団
〒540-8510 大阪府大阪市中央区城見1-3-50
Tel. 06-6947-2184 Fax.06-6947-2198
<https://jemf.or.jp>

デザイン 株式会社 デザイン・グリッド

